FC77
31

FC77
31

東京文理科大學教授
神保格著

小學國語讀本朗讀法（卷三）

尋二前期用

武知訓尊

東京文理科大學教授
神保格著

小學國語讀本朗讀法（卷三）

尋二前期用

FC77
31

習仙圖書
49.7.31

989201

はしがき

本書も先に公にした小學國語讀本朗讀法卷一卷二に續き、同じ趣意を以て作つたものである。

例によつて各課の斷續・速度・抑揚調子の記述にあたり馬淵冷佑氏の有益な助言を得たことを感謝する。

昭和九年四月

著者

小學國語讀本朗讀法（尋二前期用）目次

はしがき

序說……（一―七）

ショオガク　コクゴドクホン　マキノサン（本文及び解說）

イチ・ハルガキタ……一一

ニ・ナワトビ……一三

サン・ウサギ……一五

シ・トビ……一六
ゴ・シリトリ……一七
ロク・ヒヨコ……二一
シチ・カンガエモノ……二三
ハチ・トケエ……二五
ク・ウチノ　コネコ……二九
ジユウ・カエル……三〇
ジユウイチ・クニビキ……三五
ジユウニ・ササブネ……四〇
ジユウサン・ウシワカマル……四四
ジユウシ・トンボ……四九

ジユウゴ・イつスンボオシ……五一
ジユウロク・カチカチヤマ……六一
ジユウシチ・ネズミノ　チエ……六八
ジユウハチ・キンギヨ……七〇
ジユウク・ハナビ……七三
ニジユウ・キンノ　オノ……七四
ニジユウ　イチ・ジドオシヤ……八一
ニジユウ　ニ・ナガイ　ミチ……八八
ニジユウ　サン・ムシバ……八九
ニジユウ　シ・ウラシマ　タロオ……九三

〔目次畢〕

小學國語讀本朗讀法（卷三）

〔尋二前期用〕

序說

本書の書き方は卷一・卷二と同じである。念のため左に說明する。

〔甲〕は一般的箇條である。卽ちどんな種類の文章でも又どんな內容を含んだ文章にも同樣に當てはまるものである。

(イ) 發音　現代東京語に基づき、氣を附けて發音するあらたまつた物の言ひ方を標準とする。その發音を表記する方法として片假名を使ふ。

ガギグゲゴ　所謂鼻にかゝつた子音(ng)を含むことを示す。

舊來の假名遣のジヂとズヅとはそれぞれ同じ音を表す。本書では之をジ、ズの假名で表記する。

つ　促音の符號。例　キつブ

シ、ス　等左側の小三角(△)はその音節の母音が無聲化することを示す。文の

終の「アリマス」等のスも實地の言葉で母音無聲化することが多い。特に語尾をはつきり言はうとする時無聲化しないこともある。本書ではかゝる文の終の「ス」等は△この符號を附けないで置いた。又『ひろくするには』(原讀本卷三、三十頁)の様な二つの單語をつゞけて發音する場合、次に「ス」の様な無聲子音を含む音節のある時、前のヒロクのクも屢〻母音無聲化を起す。はつきり言はうとする時及び兩單語の間を切つていふ時無聲化しないこともあるから、本書ではヒロクスルの様な表記法を用ひない。

(ロ) **アクセント**　アクセントとは「こゑ」の高低關係であつて、各單語に社會的慣習として定まつてゐるものをいふ。

例　ハル「春」　ヤマ「山」　ナワトビ「縄飛」　カエっタ「孵」「歸」　等

の如きを「起伏式アクセント」と名づける。其の單語の中で他の音節よりも比較的に聲の調子を高くいふ部分に右側の縱線を附ける。

例　トリ「鳥」　ツズイテ「續」　等

の如きを「平板式アクセント」と名づける。單語の終まで聲の調子を下げないのが特徴である。

アタマオ　ダシテ　の如く二箇の單語がある時、アタマの高い部分(…タマ…)とダシテの高い部分(ダ…)と比べ、いづれが高いかはアクセントの問題に入らない。各實地の言語の場合、前後の關係・其の場の事情・言葉を使ふ人の心持によつて一々ちがふ。アタマオの方の意味を強めようとすれば「…タマ…」の部分の聲が強くなり同時に調子が高くなる。從つて「ダシテ」のダよりも「…タマ…」の方が(其の場合だけは)遙に高く發音される。ダシテの意味を強めようとすればダの調子は「…タマ…」よりも高く發音される。これらは言葉調子の事實であつてアクセントではない。しかし、ウゴイテ　イマス　の様に屢〻連結して使はれる二箇の單語があり、その中イマスの如き一方が、多く意味を强められないものがある。この時は兩語合してウゴイテイマスといふ型の様に發音される。特殊の場合イマスを强める時はイマスのマが高く發音される。これはアクセントに準ずべきものである。この例に二種ある。

〔A〕『續き上り』(假定の名稱)

例　ハジメテ(平)クダサイ

續ける時　ハジメテクダサイの型の様にいふ。

〔B〕『續き下り』(假定の名稱)

例　ウゴイテ　イマス

續ける時　イマスのアクセントが餘り高くならない。時には

ウゴイテイマスの型の樣に發音される。

〔乙〕は特殊的箇條である。卽ち一つ一つの文章に應じて變るものである。原書小學國語讀本各課各文は皆前後の關係によつて定まる一定の內容(思想感情)を含んでゐる。この內容を音聲によつて最も良く表現するには左に揭げる斷續・速度・抑揚調子に適當なものを用ひなければならない。但し人によつて原文の解釋が多少ちがふ事も有り得る故に、音聲の表現も或程度のちがひを許してよい。本書に記したのは、著書の考で成るべく總ての人の考と一致するであらうと思はれる點を述べたものである。

(イ) 斷續　本書には假名符號を以て

ハルガ　キタ

の樣に各單語を離して表記するが、是は實際朗讀する時必ず聲を切るといふ意味ではない。發音(殊にアクセント)を表記する必要上各〻の單語を分けて示

すだけである。但し此の單語もやはり元は音聲の切れ目によつて定まるものである。卽ち多くの實地の言葉において澤山の實例を總合し、「前後に同時に聲の切れ目を附けることのある最小限度の一續き」を取り出し、之を單語と名づけたものである。故に「ハル」は一つの單語(二音節)であり、「ハルガ」は別の一つの單語(三音節)であり、同樣に「サク」と「サイタ」と「サキマシタ」とはそれぞれ別々の單語であるといふ。或文章で幾つかの單語を一續きに發音する場合は一つの單語と次の單語との間に聲の切れ目は全く無いのである。たゞもし聲を切る場合は或單語の終で切ること勿論である。

〔句讀點と斷續〕

原文の句讀點は必ずしも朗讀を考に入れて附けたものでない。句讀點は意味の斷續を示すものであり、朗讀における聲の斷續も意味の斷續を示すことが一つの仕事である(それぱかりではない)、故に兩者は或程度まで一致する筈であり從つて原文の句讀點は朗讀における聲の斷續を考へる參考として役に立つものである。けれども「句讀點のある處は必ず聲を切る句讀點の無い處は必ず續ける」といふ風に器械的に窮屈に考へるのは良くない。前述の如

く讀本原文の句讀點は必ずしも朗讀を考に入れたものではないから、もし朗讀を考に入れたとすれば句讀點の附け方は多少異つたであらう。一々の實例は本書の各處に出るが、句讀點の有る處で聲を切らない方がよい場合、句讀點は無くとも聲を切つた方が良い場合、一々本文に記述した。

本文に記入した符號

一　聲を切る符號

‖　間を置く符號　但しこれは多く文章の終(。點を書く處)に當る。多くは稍長い切れ目を置くことになる。「間」を置くといふのが適當である。

‖　休止の符合　「間」といふよりは「休止」と名づける方が適當である。稍長い間を示す。これらの切れ目・間・休止は飽くまで「特殊的箇條」である。原文を解釋する人の心に從ひ、切れ目等を置くか置かないかの區別、置くとしてもどれだけの長さに切るかの區別は必ずしも嚴格に一定するとはいへないであらう。

斷續隨意　この名稱を用ひて述べた處は、切つても切らないでも意味の表現に大した影響がない。

> 人の言葉の終

例　タロオ」ヒヨコガ　カエつタヨ>ト

人の言葉を自然の調子でいふ時「ト」に移る堺で一寸聲を切る方が言ひ易い。但し「ト」は所謂テニヲハの一つで常に上の語につゞけて發音するのが原則である。此の性質を示すため、一此の横線と區別して>を使ふ。

(ロ)　速度

(ハ)　抑揚調子

これは一々本文の次に記した。本文の中に特別な記號を使つて記入することを避けた。

以上の外詳しい說明は本書卷一の序說及び

神保格著　話言葉の研究と實際　明治圖書株式會社發行

を參考していたゞきたい。

又原讀本朗讀の一例はコロムビア教育レコードの中にある。

ショオガク　コクゴドクホン　マキノ　サン

ジンジョオカヨオ　モンブショオ

一頁　イチ‖　ハルガ　キタ

二頁　ハルガ　キタ　ハルガ　キタ　ドコニ　キタ　ヤマニ　キタ　サトニ　キタ　ノニモ　キタ　ハナガ　サク　ハナガ　サク　ドコニ　サク‖　ヤマニ　サク　サトニ　サク　ノニモ　サク‖　トリガ　ナク　トリガ　ナク

三頁　ドコデ　ナク‖　ヤマデ　ナク　サトデ　ナク　ノデモ　ナク‖

〔甲〕

(イ)　發音　所謂「文」の終に來る「サク」「ナク」のクが母音無聲化を起すことがある。殊にハナガサク。ハナガ…の如く續けて發音する時無聲化の

傾向が多い。「…サク、サトニ…」「…ナク、トリガ…」に於ても同様である。これクの次にハhaサsaトtoの如くhstといふ無聲子音が來るからである。

(ロ) **アクセント**　キタ|　比較、クル、コ|ナイ、キマ|ス。

〔乙〕

(イ) **斷續**　ハルガキタ、ハナガサク、トリガナクを各二回づゝ繰返してあるが、その各二回の中間は斷續隨意である。ヤマニキタ|　サトニキタ|　ノニモキタ|　これらの中間は一々切る方がよい。

(ロ) **速度**　中位の速度が適當であらう。餘り速過ぎる時は韻文の朗讀として不可であり、餘り遲過ぎる時は「春が來た」喜びの感情を現すに適しない。

(ハ) **抑揚調子**　ハルガキタ、ハルガの方を強める。從つてキタ|のアクセントは餘り高くしない方がよい。ドコニキタの終は尻下りが適當である。

四頁

五頁

ニ　ナワトビ

イチダン|　ニダン|　ナワ|　トンダ　トンダ　サンダン
トンダ|　ヨ|ダンモ　トンダ　ゴ|ダンノ　ナワ|モ　ツズイテ
トンダ　ロク|ダン|　シチ|ダン　ハチ|ダン　トンダ　クダン|
ジュウダン|　ナワ|　トンダ　トンダ

〔甲〕

(イ) **發音**　『四ダン』はシダンといはない『七ダン』はナナダンといはない方がよい。

(ロ) **アクセント**　『五ダン』ゴダンと平板式にいふこともある。『九ダン』は通常平板式である。但東京の地名九段坂を略して九段といふ時はク|ダンである。『件の』は多くク|ダンである。

〔乙〕

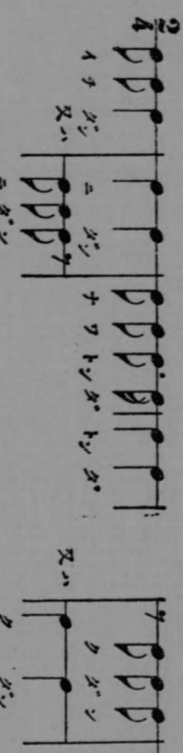
(イ) **斷續**　本文表記の外特にいふべき事なし。

(ロ) **速度**　此の歌は必ずしも縄飛びの動作に一々伴はせて歌ふものと解しないでよい。卽ち飛ぶ人が一回飛んだ時『一だん飛んだ』と唱へる如く解しないでよい。もしさう解する時は一段から次の一段への中間に餘程長い時間を要することとなる。又一段から次の一段まで實際の遊戯で長い時間を要するといふ事實に擬するため朗讀の際稍長い休止を置くとしても、韻文としての連續が失はれることになる。故に此の韻文は他の韻文と同樣に普通の適當な斷續と速度を以て言ふのが良い。從つて若し兒童が實際に縄飛びの遊戯を行ひながら此の歌を唱へ(又は歌ふ)と想像するにしても、一回飛んだ時「一段とんだ」といひ次回飛んだ時「二段飛んだ」といふ樣に一々の動作と文句と伴ふことは出來ない。兒童等が此の歌を歌ひ續けつゝ一方で代る〳〵飛ぶといふ事になるであらう。

(ハ) **抑揚調子**　此の韻文のリズムは

六頁

七頁



右の如く規則正しく二拍子に朗讀するのが面白いであらう。

サン　ウサギ

シロイ　カワイイ　ウサギサン　オミミガ　ナガイ

メガ　アカイ　オニワニ　ダスト　ヨロコンデ

ピョンピョン　ハネマス　オドリマス

〔甲〕

(イ) **發音**　特に記すべきことなし。

(ロ) **アクセント**　オミミ、オの附く形は平板式である。單獨にはミミである。

〔乙〕(イ) 斷續　シロイの次は切らない。ハネマスの次は斷續隨意。
(ロ) 速度　通常。
(ハ) 抑揚調子　特に變化を附けるべき處なし。自然に朗讀すれば自然にリズムも顯れるであらう。

八頁　シ　トビ

九頁　トビガ　ナク　ハルノ　ソラ　マルイ　オオキイ　ワオ
カイテ　ピイヒョロ　ピイヒョロ　ピイヒョロロ　モリノ
ウエデモ　ナイテ　イル　マチノ　ウエデモ　ナイテ
イル　ピイヒョロ　ピイヒョロ　ピイヒョロロ

〔甲〕(イ) 發音　特に記すべきことなし。
(ロ) アクセント　オオキイ　比較、オオキナ。

〔乙〕(イ) 斷續　マルイの次で切らない。『上でも』の次も切らない。
(ロ) 速度　やゝ遲くいふのが良いであらう。のどかな春の空、ゆつくり飛ぶとびの姿を表す心である。「ピイヒョロ」の「ピイ」の部分を任意に長く引延して發音するのも面白いであらう。
(ハ) 抑揚調子　『森の上』と『まちの上』と同樣に稍强く、從つて『ないてゐる』は比較的弱くいふと良い。その代り『ピイヒョロ』鳴聲は稍强くいふ。且鳥の鳴聲に稍似た言ひ方をするのも良いであらう。

十頁　ゴ　シリトリ

十一頁　タロオ　ユキコサンカラ　ハジメテ　クダサイ　ユキコ
デワ　イイマスヨ　スズメ　ハナコ　メダカ（以下人名を略す）

十二頁　カヤ　ヤマ　マデスネ　ソオデス　ヤマデスカラ
マナイタ　タヌキ　キシャ　シャツ　ツクエ　エハガキ

キっプ　プデスカ　ソオデス　プワ　コマルナ　ハヤク
ハヤク　ハヤク　ハヤク　ハヤク　ツズケナイト
タロオサンノ　マケデスヨ

〔甲〕

(イ) **發音**　ユキコサン、このキの母音無聲化するため「ユっコサン」の樣に發音するのは良くない。ハヤク、此處の樣に早く催促する心でいふ時クの母音無聲化を起すことが多い。

(ロ) **アクセント**　ハジメテクダサイ、續けていふ時ハジメテクダサイの樣になる。カヤ　參考「萱」はカヤである。

〔乙〕

(イ) **斷續**　自然の會話に近くいふには一人の言と次の人の言葉との間の斷續に大に注意を要する。種々の實況を想像することによつて斷續の工合は色々に出來るであらう。

例へば次の如し。『ゆき子さんからはじめてください。』(通常の間を置く)『では、いひますよ。(一寸切る、次の語はゆつくり)すすめ。』(通常の

間、但し、一寸考へて「めだか」といふ語を思出すだけの間)『めだか。』(始めは太郎機敏に思出したと想像し、直に)『かや』(通常の間)『山。』(花子一寸困る。少し長い間を置いて)『ですね』(直に)『さうです。山ですから。』(此の時うまく思附いたと想像し、その心で、直に)『まないた。』(通常の間)『たぬき。』(通常の間)『きしや。』(花子前には困つたが今度は幸に直ぐ思附いたと想像し、その心で間を短く、勢よく)『しやつ。』(通常の間)『つくゑ。』(此の邊でゆき子も一寸困ると想像し、稍長い間をおき)『ゑはがき。』(通常の間)『きっぷ』(太郎大に困る。稍長い間)『ぷですか。』(直に)『さうです』(直に、又は尙困つて考へると想像すれば再び稍長い間、いづれでも良い)『ぷはこまるな。』(直に、殆ど間を置かぬ位)『早く、早く。』(直に又は數人で掛け合ひの對話若くは朗讀をする場合には、ゆき子と花子の『早く早く』が同時に重なり合ふ位に言つてもよい。)

(ロ) **速度**　自然の會話に近くいふには速度の加減も大に注意工夫を要する。『すすめ』『めだか』等の各單語は稍ゆつくり言ふのが良い。太郎の『ぷはこまるな』は稍ゆつくり、『早く早く』以下は速く。

(ハ) **抑揚調子**　『ゆき子さんから』を強める。『はじめてください』の終は尻下り。『いひますよ』の終は尻上り。『まですね』の終は一べん上つて後下る調子、從つて「ね」を多少長く延して發音してもよい。『山ですから』此の『山』の「マ」音を特に強くいふことが必要である。『ぶですか』の終は尻上りがよい。斯ういふ場合尻下りにいふ事もある。その時は必しも相手から答を求めるのでなく、自問しつゝ「それは困つた」といふ心を表出する獨語體のいひ方になる。しかしこれは稍大人びた調子であつて子供の言葉としては稍ふさはしくない感がある。殊に此處は次に『さうです』といふ答がある所を以て見れば『ぶですか』の終が尻上りであつたことを知る。『ぶはこまるな』いかにも困つた調子でいふべきである。『な』は一べん上つて又下る調子、從つて少し長く發音してよい。

十三頁

ロク　ヒヨコ

オトオサンガ　タロオ　ヒヨコガ　カエっタヨ〉ト
オっシャイマシタ　ボクガ　ミニ　イクト　ヒヨコガ
オヤドリノ　ムネノ　トコロカラ　チイサナ　アタマオ
ダシテ　ピヨピヨト　ナイテ　イマス　ハネノ　シタニモ

十四頁

ニサンバ　イル　ヨオデス　ヒヨコガ　ナクト
オヤドリワ　ハナシデモ　スル　ヨオニ　ココココト
イイマス　ボクワ　ヒヨコガ　カワイクテ　タマリマセン

〔甲〕

(イ) **發音**　カエっタ、東京其の他の俗語で「カイっタ」といふ事がある。「カ

エっタ」とはつきり「エ」をいふべきである。

(ロ) **アクセント**　カエっタ、『歸つた』も同じ型である。『ボクガ』東京の子供は屢〻ボクガと平板式にいふ。それでもよいであらう。(小學國語讀本朗讀法卷二、三五頁第二行參照)　ムネノ「ノ」の附かない語はムネである。

チイサナ　比較、チイサイ、シタニモ又はシタニモともいふ。イルヨオデス、續けていふ時イルヨオデスの樣になる。スルヨオニも同樣。

ココココ　アクセント不定、朗讀には鳥の聲に擬すればよい。カワイクテ　比較、カワイイ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　ダシテの次斷續隨意。

(ロ) **速度**　通常、特に變化を附けるべき處なし。

(ハ) **抑揚調子**　カエっタヨの終は尻上りの調子がよい。ピヨピヨ及びココココは雞の鳴聲に擬するとよい。カワイクテを强める。

十五頁

シチ　カンガエモノ

コノ　ハコノ　ナカニ　オモシロイ　ヒトガ　イマス

十六頁

アテテ　ゴランナサイ　ソノ　ハコオ　カシテ　クダサイ

ハイ　フっテモ　ヨオゴザイマスカ　ハイ　タイソオ

カルウゴザイマスネ　コノ　ヒトワ　ドンナ　イロノ

十七頁

キモノオ　キテ　イマスカ　アカイ　キモノオ　キテ

イマス　ソレデワ　オンナデショオ　イイエ　ソレデワ

オトコノコデスカ　イイエ　トシヨリデス　ドオモ

コマリマシタ　ドンナ　カオオ　シテ　イマスカ

カオジュウ　ヒゲダラケデス＝　ソレデワ　テモ　アシモ
ナイデショオ＝　ハイ＝　ワカリマシタ　ダルマサンデス＝

〔甲〕

(イ) **發音**　フツテモ、フの次にテの無聲子音(t)が來るため、フの母音が無聲化して兩唇無聲摩擦音のみとなる。但フル(振)の形の時はルの子音(r)は有聲音であるからフの母音が無聲化しない。

(ロ) **アクセント**　カンガエモノ又はカンガエモノともいふ。ヒトガ又はヒトガと平板式にいふこともある。アテテ云々、續ける時アテテゴランナサイの樣になる。カシテクダサイ、キテイマスカも同樣である。イロノ、單獨又は「ノ」以外のてにをはの附く時イロ、イロガ等の型である。ダルマサン、單獨には平板式である。

〔乙〕

(イ) **斷續**　二人の對話の中間における休止の長短に多少の工夫をすることが必要であらう。例へば『どうもこまりました』の前で困つた事を表すため多少長い休止を置く等。

(ロ) **速度**　『どうもこまりました』は多少ゆつくり云ふ方がよい。その

十八頁

代り『わかりました』は稍速くいふ。

(ハ) **抑揚調子**　『あててごらんなさい』の終は尻上り尻下りいづれでもよい。但し尻下りにいふ時語氣が強く聞え過ぎない樣注意する必要がある。『ふつてもようございますか』の終は必ず尻上り。『かるうございますね』終は一ぺん上つて又下る調子。其の他『きてゐますか』『をんなでせう』『をとこの子ですか』『かほをしてゐますか』『ないでせう』の終は皆尻上りの調子でなければならない。

ハチ＝　トケエ＝

ボクノ　ウチニ　オオキナ　ボンボンドケエガ　アリマス＝
アサカラ　バンマデ　カッチン　カッチン＞ト　ウプイテ
イマス＝＝マイアサ　ボクガ　メチ　サマス　コロ
ボン(以下略)＞ト　ムッツ　ナリマス＝　ガッコオエ　イク

十九頁

トキヤ　カエっタ　トキニ　ボクハ　キっト　トケエオ
ミマス　オカアサンモ　トキドキ　ゴランニ　ナっテ
ソロソロ　ゴハンノ　シタクオ　シマショオ　ナドト
オっシャイマス　キノオ　ボクガ　ガっコオカラ
カエっテ　キテ　ミルト　トケエガ　アリマセン
オカアサンニ　キクト　グアイガ　ワルク　ナっタカラ
トケエヤエ　ナオシニ　ヤっタノデス＞ト
オっシャイマシタ　カっチン　カっチント　ユウ　オトガ
キコエナイノデ　ナントナク　サビシイ　キガ
シマシタ　ケサ　ゴハンノ　トキニ　モオ

二十頁

シチジカナ＞ト　イっテ　ニイサンガ　トケエオ
ミヨオト　シタノデ　ボクガ　ワライダシマスト
ミンナガ　オオワライオ　シマシタ　ケレドモ
ガっコオニ　イクトキ　ボクモ　ツイ　トケエオ
ミヨオト　シマシタノデ　ソバニ　オイデニ　ナっタ
オカアサンガ　オワライニ　ナリマシタ

二十一頁

〔甲〕

(イ) **發音**　トケエ、日常の言語でトケイとは云はない。『大わらひをしました』、日常の言語では『大わらひしました』といふ方が自然である。

(ロ) **アクセント**　ウチニ、續けてボクノウチニといふことも多い。但しボクを平板式にいふ人はボクノウチニといふ。カっチン、アクセント不定、カっチンの如くいつてもよしカっチンの如くいつてもよい。サマス、コロ、續ける時コのアクセントが餘り高くならない。ボン、ボ

二十二頁

ンの音アクセント不定。イクトキヤ、續ける時イクトキヤともいふ。カエっタトキニ、續ける時キのアクセントが餘く高くならない。ゴランニナっテ、續ける時ゴランニナっテの様になる。ゴハン、又はゴハン、といふ人もある。ワルクナっタカラ、續ける時ナのアクセントが餘く高くならない。オイデニナっタ、續ける時オイデニナっタの様になる。オワライニナリマシタ、續ける時オワライニナリマシタの様になる。

〔乙〕

(イ) **斷續** 『學校へいく時や』の次は切らない方がよい。『かへって來て見ると』の處二様の切り方が出來る。(一)「カエっテキテミルト」と續けてミルトの終で切る。この時は「見る」といふ意味が比較的輕く聞え、「時計の無いこと」の意味が強く聞える。(二)「カエっテキテ」と切る。この時は「見る」といふ意味が稍強められる。この時も「ミル」の次は斷續隨意である。『けれども』の次で切る方がよい。『けれども學校へいく時』と續けてその終で切るのは良くない。

(ロ) **速度** 「カっチンカっチン」や「ボンボン云々」の時計の擬音はゆっくりいふこと、柱時計の音は遲いものだからである。『そろそろ』云々の母の言葉も殆ど獨り言の様にいふのであるから稍遲くいふ。『もう七時かな』は多少速くいふのも良いであらう。登校前の急がしい氣持を表す心である。

(ハ) **抑揚調子** ボンボンドケエの方を強める。『大きな』を強め過ぎるのは良くない。『きっと』を強める『とけいがありません』、此處は『ありません』の方を強める。無いのが意外であつたといふ心を表す。『なほしに』を強める。『なんとなく』よりも『さびしい』の方を強める。『七時かな』の終は尻上り調子。『大わらひ』を強める。『ぼくもつい』は『ぼくも』の方を強める方がよい。『…も』だからである。

二十三頁

ク　ウチノ　コネコ

ウチノ　コネコワ　カワイイ　コネコ　クビノ　コスズオ
チリチリ　ナラシ　スソニ　カラマリ　タモトニ

二十四頁

スガル‖ウチノ　コネ|コワ　カワイイ　コネコ‖　クビノ
コスズオ　チ|リチリ　ナラシ|　マリト　ジャレテワ
エ|ンカラ　オチル‖

〔甲〕(イ) 發音　スソニ、スの母音が無聲化し易いが、こゝは無聲化しない樣にいふ方が明瞭でよい。
(ロ) アクセント　エンカラ　參考、エンガワ(平板)。

〔乙〕(イ) 斷續　本文表記の外特に注意すべき點なし。
(ロ) 速度　通常。
(ハ) 抑揚調子　特に著しい變化を附けるべき處なし。

二十五頁

ジ|ュウ‖　カエル‖
カエルノ　コドモガ　カワバタデ　アソンデ　イマ|シタ‖
ソコエ　ウシガ　キテ|　ミズオ　ノミマ|シタ‖　コガ|エルワ

二十六頁

ビっクリシテ　ニゲダシマ|シタ‖　コガ|エルワ　アワテテ
ウチエ　カエリマ|シタ‖　ソオシテ|　オトオサンガエルト
オカアサンガエルニ|　オオキイ　オオキイ　バケモノガ
ミズオ　ノミニ　キマ|シタヨ>ト　イイマ|シタ|
キ|ンジョニ　イタ　オオガ|エルガ　ソレヲ　キイテ|　ソノ
オ|オキナ　バケモノワ　ワタシクライモ　ア|っタカネ>ト
キキマ|シタ‖　コガ|エルワ|　ド|オシテ|　ド|オシテ|　イマ|マデ
ミ|タ　コト|モ　ナイホド　オオキイノデス>ト
コタエマ|シタ‖　オオキイノガ　ジマンノ　オオガ|エルワ|
ウント　イキオ　スイコンデ　オナカオ　フクラマセテ|

二十七頁

ソンナラ　コノクライモ　アッタカネ＞ト　イイマシタ
コガエルワ　クビオ　フッテ　トテモ　ソンナ　モノデワ
アリマセン＞ト　イイマシタ　デワ　コノクライカネ＞ト
イッテ　オオガエルワ　イッソオ　オナカチ

二十八頁

フクラマセマシタ　コガエルワ　オジサン　オヨシナサイ
イクラ　オナカオ　フクラマセテモ　カナイマセンヨ＞ト
イイマシタ　シカシ　オオガエルワ　コンドコソト
イッショオケンメエニ　ナッテ　イキオ　スイコミマシタ
オナカワ　マルデ　フウセンダマノ　ヨオニ
フクレマシタ　スルト　ポント　オオキイ　オトガ　シテ

二十九頁

オオガエルノ　オナカガ　ヤブレテ　シマイマシタ

三十頁

〔甲〕

(イ) **發音**　ワタシクライ、又はワタシグライともいふ。此處は讀本の假名に從つて「ク」と「清音」を發音する。コノクライは決してコノグライとはいはない。參考、コノクライはコレグライともいふ。

(ロ) **アクセント**　アソンデ　イマシタ、續ける時アソンデイマシタの樣になる。同樣の例はフウセンダマノヨオニがある。ミタ　コトモナイ、續ける時コトモナイ、ナイのアクセントが餘り高くならない。ウント、アクセント不定、ウントの樣に云つてもよし、平板式の樣に云つてもよい。ソンナ　モノデワ、續ける時ソンナモノデワ又はソンナモノデワともいふ。コンドコソト、コソを强める時はコソの樣にいふ。ポント、アクセント不定。ヤブレテ　シマイマシタ、續ける時シマイマシタのアクセントが餘り高くならない。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『子蛙はびっくりして』と續けてその終で切るか、『子蛙はびっくりしてにげ出しました』と續けてその終で切るか、こゝ

はいづれでも良いであらう。『大きい大きいばけもの』と續ける。『ではこのくらゐかねといつて』の次で切り、『大蛙は一そう……』と續ける。『しかし、大蛙は』の間は斷續隨意。『こんどこそ』を強めるためその前の『大蛙は』の次で一寸切つた方がよいであらう。

(ロ) **速度**　大蛙の言葉はすべて稍ゆつくり云ふと面白いであらう。殊に後の方になつて次第に力を入れる所は一層ゆつくり云ふのが良いであらう。『をぢさんおよしなさい』は稍速くいふ。急いで止めようとする心を表す。『ふくれました。すると…』の間は休止を短くするのが一つの讀み方である。「忽ち破れた」といふ心を表す。

(ハ) **抑揚調子**　『びっくりして』『あわてて』を強める。『大きい大きいばけもの』いづれも同様に強める。『來ましたよ』の終は尻上りの調子『わたしくらゐもあつたかね』『このくらゐかね』の終も尻上りの調子。『どうして』の終は尻下りの調子。『とても』を可なり強めるが良い。『をぢさん』の終と『およしなさい』の終と、『かなひませんよ』の終と皆尻下りの調子でなければならない。『かなひませんよ』の終

を尻上りにすると穏かに告げ知らせる様な心持に聞えるので、此の場合不適當である。此處は強ひて押し附ける様に制止しようとする心持であるから尻下りでなければならない。『こんどこそと』を強める。又はコソをコソといふアクセントの型にして強めても良い。『ふうせん玉』を強める。『ぽんと』は「大きい音」とあるから稍大きい聲でいふ方がよい。殊に『ポーン』と稍延ばして云つても良いであらう。『やぶれて』を強める。

ジュウイチ　クニビキ

オオムカシノ　コトデス　カミサマガ　ドオカ　シテ
コノ　クニオ　モっト　ヒロク　シタイト　オカンガエニ
ナリマシタ　クニオ　ヒロク　スルニハ　ドコカノ
アマっタ　トチオ　モっテキテ　ツギアワセタラ

三十二頁

ヨカロオト　オカンガエニ　ナリマシタ　カミサマワ
ウミノ　ウエオ　ズット　オミワタシニ　ナリマシタ
スルト　ヒガシノ　ホオノ　トオイ　クニニ　アマッタ
トチノ　アルノガ　ミエマシタ　ソコデ　カミサマワ
ソノ　クニニ　フトイ　フトイ　ツナオ　カケテ
アリッタケノ　チカラオ　ダシテ　オヒキニ　ナリマシタ
コッチエ　コイ　エンヤラヤ　コッチエ　コイ

三十三頁

エンヤラヤ＞ト　カケゴエ　イサマシク　オヒキニ
ナリマスト　ソノ　トチガ　チギレテ　ウゴキダシマシタ
ソオシテ　オオキナ　フネノ　ヨオニ　ウミノ　ウエオ

三十四頁

グングント　コッチエ　ヤッテ　キマシタ　カミサマワ
ソノ　トチオ　コノ　クニニ　ツギアワセテ　クニオ
ヒロク　ナサイマシタ　シカシ　マダ　セマイト
オカンガエニ　ナリマシタ　ソコデ　マタ　ウミノ
ウエオ　オミワタシニ　ナリマシタ　コンドワ　ニシノ
ホオノ　トオイ　クニニ　ヤハリ　アマッタ　トチノ

三十五頁

アルノガ　ミエマシタ　カミサマワ　ソノ　トチニモ
ツナオ　カケテ　コッチエ　コイ　エンヤラヤ　コッチエ
コイ　エンヤラヤ＞ト　チカライっパイ　オヒキニ
ナリマシタ　コレモ　オオキナ　フネノ　ヨオニ

ウゴイテ　コッチエ　ヤッテ　キマシタ（カミサマワ
コオシテ　ニッポンノ　クニニオ　ヒロク　ナサッタト
ユウ　コトデス』

〔甲〕

(イ) **發音**　ヒロクスルニワ、續ける時クの母音が屢〻無聲化する。グングント、グは二つとも鼻音でないグである。

(ロ) **アクセント**　オオムカシノ　コトデス、續ける時コトデスのアクセントが餘り高くならない。同様に、續ける時第二の語のアクセントが餘り高くならない例は、フネノヨオニ、ヒロクナサイマシタがある。カミサマ、又はカミサマといふ人もある。オカンガエニナリマシタ續ける時オカンガエニナリマシタの様になる。同様の例は、オミワタシニナリマシタ、オヒキニナリマシタ（……ナリマスト）、ヤッテキマシタ、ヒガシノホオノ、ニシノホオノがある。モッテキテ『持って』『來て』を別々にいふ時は「モッテ」「キテ」である。カケテ　比較、カケテ（平）

は「缺けて」の意。「驅けて」はカケテ　參考、カケル「掛、驅」カケル（平）「缺」。チギレテ　參考、チギレル。マタ（平）、演說等でマタといふこともあるが、此の文の様な日常の言葉では常に平板式である。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『ひろくしたいと』の次は切らない方がよい。『つぎあはせたらよからうと』の次も切らない方がよい。『うみの上を』の次も切らない方がよい。『そこで神さまは』の次で切る。『その國に太い太い……』の間は切らない方がよい。『力を出して』の次は切らない方がよい。

(ロ) **速度**　特に變化を附けるべき處なし。

(ハ) **抑揚調子**　『もっとひろく』は『ひろく』の方を強める。『大きな舟の』の大きなを餘り強め過ぎるのは良くない。『舟』の方を強める。『まだ』を強める。『西の方』を強める。『これも』（三十五頁）を強める。今度は『大きな舟を』強めない。

三十六頁

ジュウニ　ササブネ

タロオ　マサオサン　ササブネオ　ナガシテ
アソビマショオ　マサオ　アア　ソオ　シマショオ
ササブネノ　キョオソオオ　シマショオ　タロオ

三十七頁

ジロオチャンモ　ナカマニ　オハイリナサイ　ネエサンワ
シンバンインニ　ナっテ　クダサイ　ミヨコ　ハイ
ナリマショオ　サンニンワ　メエメエ　ササノ　ハオ
トっテ　フネオ　コシラエマシタ　ミヨコサンワ
カワシモノ　ドバシノ　ウエニ　タチマシタ　ミヨコ

三十八頁

サア　ワタクシガ　イチ　ニイ　サント　イっタラ
イっショニ　フネオ　ダスノデスヨ　イチ　ニイ　サン
サンニンワ　イっショニ　フネオ　ダシマシタ　フネハ
ドバシノ　ホオエ　ナガレテ　イキマス　サンニンワ
フネト　ナランデ　カワノ　フチオ　カケテ　イキマス

三十九頁

クサノ　ハニ　トマっテ　イタ　チョオチョオガ
トビタチマシタ　ミヨコ　アラ　チョオチョオガ
ジロオチャンノ　フネニ　トマリマシタ　フネワ

四十頁

ダンダン　ドバシエ　チカク　ナリマス　ジロオ　ホオラ
モオ　ジキ　ショオブダ　ミヨコサンワ　イっチャク

ジロオチャン〉ト　オオキナ　コエデ　イイマシタ『マサオ』　ジロオチャン　バンザイ』　タロオ』　ジロオチャン　バンザイ』　ミヨコ』　ジロオチャンノ　フネニワ　チョオチョオノ　センドオサンガ　ノッタカラ　カッタノデショオ』

四十一頁

〔甲〕

(イ) **發音**　太郎・正雄等の人名は朗讀の際必ずしも一々讀まないでよいであらう。殊に教室又は學藝會等で二三人の兒童に役割を配して對話させる時は人名を一々讀まない方がよい。『次郎チャン』、『屢、兒童の間に行はれる樣にジロ、チャンとロを短くいつても良いであらう。

(ロ) **アクセント**　ナッテ　クダサイ、續ける時クダサイのアクセントが餘り高くならない。ハオ「葉を」(平板)　比較、ハオ「齒を」。イチ、ニイ、サン、

號令を掛ける時はいつも上記の樣に第一音節を高くいふ。『一、二、三』と數字をいふ時はイチ、ニ、サンである。ドバシノ　ホオエ、續ける時ドバシノホオエの樣になる。ナガレテ　イキマス、續ける時イキマスのアクセントが餘り高くならない。同樣の例はカケテイキマス、チカクナリマスがある。チョオチョオ、又はチョオチョオといふ人もあるが、昔からの慣用は平板式である。俗語ではチョオチョと短くいふ。又『蝶』一字を音でいふ時はチョオである。ホオラ、アクセント不定、多くはホを强く且高くいふであらう。バンザイのアクセントについて小學國語讀本朗讀法卷一、二五頁(ヒノマルノハタバンザイの項)參照。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『次郎チャンモ』の次は切らない。アラ〈チョオチョオガの間(〈)は切る。『次郎チャン(バンザイ』の間(()は切らない方がよい。終のミヨ子の言葉『次郎チャンノ舟ニハ云々』は自然の言葉では終まで切らないでいふであらう。

(ロ) **速度**　合圖をする『一、二、三』は餘り速くいはない方がよい。「ホオラ

モオジキ云々」は多少速くいふ方が面白い。

(ハ) **抑揚調子**　太郎の始めの言葉『サ、舟ヲ』を強める。次の正雄の言葉『キャウサウ』を強める。『次郎チャンモ』と『ナカマニ』とを共に強め、『ネエサン』と『シンバンキン』とを共に強める。『舟ヲ出スノデスヨ』の終は尻上りの調子。

四十二頁

ジュウサン　ウシワカマル

ツキノ　ヨイ　バンデシタ　ウシワカマルガ　フエオ
フキナガラ　アルイテ　イマシタ　ゴジョオノ　ハシニ
キマスト　マテ＞ト　ユウ　モノガ　アリマス　ミルト
オオナギナタオ　モっタ　オオキナ　オトコガ　タっテ
イマス　ウシワカマルワ　ダレダ　ナンノ　ヨオカ＞ト

四十三頁

イイマシタ　ベンケエダ　ソノ　カタナガ　モライタイ
ヨイ　カタナオ　センボン　アツメル　ツモリデ
クヒャク　クジュウ　クホンワ　トっタ　モオ
イっポンデ　センボンダ　サア　カタナオ　ダセ
ウシワカマルワ　ビクトモ　シマセン　カタナガ
ホシイカ　ホシケレバ　トっテ　ミヨ＞ト　イイマシタ
ベンケエワ　オオナギナタオ　フリマワシテ　キっテ
カカリマシタ　ウシワカマルワ　ヒラリト　ランカンノ

四十四頁

ウエニ　トビアガリマシタ　ベンケエガ　ウエオ　キルト

四十五頁

ウシワカマルワ　シタエ　トビオリマス　ミギオ　キレバ

四十六頁

ヒダリエ　トビノキ　ヒダリオ　キレバ　ミギエ
トビノキマス　ツヨイ　ベンケエモ　ダンダン　ツカレテ
キマシタ　ウシワカマルワ　ソノトキ　オオギデ
ベンケエノ　ウデオ　ツヨク　タタキマシタ　ベンケエノ
オオナギナタガ　ガラリト　オチテ　シマイマシタ
トオトオ　ベンケエワ　コオサン　シマシタ　ソオシテ
ウシワカマルノ　ケライニ　ナリマシタ

〔甲〕

(イ) **發音**　ベンケエ、此の名は日常語にも屢〻用ひられるため、キレエ等の語と同様「…ケエ」と發音する。

(ロ) **アクセント**　ウシワカマル、略して「牛若」だけいふ時はウシワカ(平板)である。フキナガラ　參考「拭きながら」の時はフキナガラ(平板)。アルイテ　イマシタ、續ける時はイマシタのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、タッテイマス、ビクトモシマセン、トッテミヨ、キッテカカリマシタ、ッカレテキマシタ、オチテシマイマシタ、ケライニナリマシタがある。ゴジョオノ　ハシニ、一箇の固有名詞として「五條橋」の如く一續にいふ時はゴジョオノハシである。ユウ　モノガ、又は續けてユウモノガ、又は續けてユウモノガ。オオナギナタ、一つ離してはナギナタ、又はナギナタ。モオ　イッポン、續けてはモオイッポン。ホシイ　比較、ホシケレバ、ホシク。フリマワシテ、東京其の他の俗語で屢〻フリマアシテと發音する。(それは避けた方がよい。)その時アクセントは、フリマアシテである。ウエオ、此處は平板である、ウエオでない。シタオも同様である。ソノトキ、別々にはソノ(平)、トキ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『見ると』の次で切り、『もった』の次では切らない。『さあ』の次は斷續隨意。『刀をだせ』の次は休止を置く、牛若丸の悠然たる態度を示す。『べんけいは大なぎなたをふりまはして』と續けて其の次

で切るよりは『べんけいは』の次で切り、『ふりまはして』の次は切らない方がよい。息も繼がせず切つて掛る心を表す。次の（四十四頁第一行）『牛若丸は』の次も切らない方がよい。『きると』『きれば』の次では切らない方がよい。『……とびのきます。〈強い……』の中間（〈）に休止を置く。『つかれて來ました』の次は休止するにしても極めて短くするのが良い。『牛若丸はその時』と續けてその次で切るとよい。切ると次の『あふぎで』云々の意味を強めることになる。

（ロ）**速度**　始めの三行『あるいてゐました』迄は稍ゆつくり讀む、靜かな光景を表す心である。牛若丸の言葉はすべて落附いてゆつくり云ふのが良い。辨慶の切つて掛る所から四十五頁第四行『とびのきます』迄は切迫した光景を表すべきであるが、速度は必ずしも甚しく速くしないでよい。寧ろ文と文との中間に殆ど休止を置かずにいふ方がこの心持をよく表すであらう。『とびのきます』の次に休止を置くこと前述の通り、而して『次の強い……來ました』を稍ゆつくりいふ、疲れた心を表す。次の『牛若丸は……』は又稍速くいふ。前のゆつ

くりと對照し、隙をねらつて機敏な動作をなす心を表す。

（ハ）**抑揚調子**　『まて』は底力のある聲を用ひるとよい。『その刀が……』刀の方を強める。『よい刀を』は『よい』の方を比較的強める。『さあ』を強める。牛若丸の言葉『刀が』を多少強めてもよいが、落附いた態度を示すとしては抑揚調子に甚しい變化を附けない方が却て適當であらう。『強い』と『べんけい』と同樣の強さでいふ。『強い』を強め過ぎると「弱い方の辨慶は疲れなかつた」等の意味を伴ふ樣に聞えて宜しくない。『強くたゝきました』『がらりと』を強める。

ジュウシ　トンボ

トンボ　トンボ　ニワノ　カキネニ　トンボガ　イっピキ

トマっタ　グルリ　グルリ　ユビデ　ワオ　カクト

ギラリ　ギラリ　メダマガ　ヒカル　チョっト　ハネオ

四十八頁

ツ　マ　モ　オ　ト　シ　タ　ラ　ス　イ　ト　ア　ッ　チ　エ　ニ　ゲ　テ　イ　ッ　タ

〔甲〕

(イ) **發音**　イっピキ、ピの母音は氣を附けて發音する時無聲化しないことがある。

(ロ) **アクセント**　グルリ、ギラリ、アクセント不定、多くはグルリ、ギラリ、又はグルリ、ギラリの樣な型に從ふであらう。チョっト、或場合の言葉調子のため　チョ　の部分を高くいふ事がある。その時　チョ　っトといふアクセント型の樣に聞える。スイト、アクセント不定、多くは平板式の樣にいふであらう。

〔乙〕

(イ) **斷續**　トンボトンボ、此の二回繰返しの中間に休止を置くか否かは、此の文の意味解釋の如何によつて變る。「アレとんぼを見附けた」といふ樣な、急に發見した心を表すと解すれば休止を置かず而も稍速くいふ。もし此の詩全體に表れた心持に從ひ、靜かに忍び寄る心、その蜻蛉を目がけて覗ひ近づく心を含めると解すれば、ゆつくり、而してトンボ　トンボの間に休止を置く。『つまゝうとしたら』の次も

『すいと』の次も切らないか又は切つても極々短く切る。急速の間に生ずる出來事を表す心である。

(ロ) **速度**　始めから『つまゝうとしたら』の邊まで十分におそく云ふがよい。終りの『すいと』以下は之と對照して稍速くいふと面白いであらう。

(ハ) **抑揚調子**　此の詩の全體は忍び寄る心で稍弱い聲を以ていふのが良い。『すいとあっちへ』も聲を大きくいふ必要はない。

ジュウゴ　イっスンボオシ

オジイサント　オバアサンガ　アリマシタ　コドモガ
ナイノデ　ドオゾ　コドモオ　ヒトリ　オサズケ
クダサイ　ト　カミサマニ　オネガイ　シマシタ
オトコノコガ　ンマレマシタ　コユビグライノ

五十頁

オオキサデシタ アンマリ チイサイノデ
イっスンボオシト ユウ ナオ ツケマシタ
イっスンボオシワ フタツニ ナっテモ ミっツニ
ナっテモ スコシモ オオキク ナリマセン
オジイサント オバアサンワ シンパイシテ
イっスンボオシノ セエガ タカク ナリマス
ヨオニ〳〵ト マイニチ カミサマニ オイノリ シマシタ
ケレドモ ヤっパリ ンマレタ トキノ ママデシタ
イっスンボオシワ ジュウサンニ ナリマシタ アルヒ
オジイサント オバアサンニ ミヤコエ イっテ エライ

五十一頁

ヒトニ ナリタイト オモイマス スコシノ アイダ
オヒマオ クダサイ〳〵ト イイマシタ イっスンボオシワ
オバアサンカラ ハリオ イっポン モライマシタ
ソレオ カタナニ シテ ムギワラノ サヤニ イレテ
コシニ サシマシタ ソレカラ オワンオ モラっテ
フネニ シマシタ オハシオ モラっテ カイニ
シマシタ イっスンボオシワ オワンノ フネニ ノっテ

五十二頁

オハシノ カイデ ジョオズニ コイデ オオキナ
カワオ ノボっテ イキマシタ ミヤコニ ツクト
トノサマノ オヤシキエ イキマシタ ゴメンクダサイ〳〵ト

五十三頁

五十四頁

ユウト　トノサマガ　デテ　オイデニ　ナリマシタ
ガ　ダレモ　イマセン　ダレダロオ＞ト　イっテ
ホオボオ　オサガシニ　ナリマシタ　ドコニ
イルノダロオ＞ト　イっテ　ニワオ　ミマワシナガラ
アシダオ　オハキニ　ナロオト　シマシタ　スルト　ソノ
アシダノ　カゲニ　イタ　イっスンボオシワ　フンデワ
イケマセン＞ト　イっテ　アワテテ　トビダシマシタ
ソオシテ　ケライニ　シテ　クダサイ＞ト　タノミマシタ
トノサマワ　コレワ　オモシロイ　コダ＞ト　イっテ
ケライニ　ナサイマシタ　サンネンバカリ　スギマシタ

五十五頁

イっスンボオシワ　アルヒ　オヒメサマノ　オトモオ
シテ　トオイ　トコロエ　デカケマシタ　トチュウマデ
クルト　ドコカラカ　オニガ　デテ　キテ
イっスンボオシヤ　オヒメサマオ　タベヨオト　シマシタ
イっスンボオシワ　ハリノ　カタナオ　ヌイテ　オニニ
ムカイマシタガ　トオトオ　ツカマっテ　シマイマシタ
オニワ　イっスンボオシオ　ツマンデ　ヒトクチニ
ノンデ　シマイマシタ　イっスンボオシワ　オニノ
オナカノ　ナカオ　アチラコチラト　カケマワっテ
ハリノ　カタナデ　チクリ　チクリト　ツツキマシタ

五十六頁

五十七頁

五十八頁

オニワ　イタイ　イタイ　イタイト　イイマシタ　ソノウチニ
イっスンボオシワ　オナカノ　ナカカラ　ハイアガっテ
ハナノ　オクオ　トオっテ　メノ　ナカエ　デマシタ
ソオシテ　ハリノ　カタナデ　メダマオ　ツツキマワっテ
ピョコリト　ジメンエ　トビオリマシタ　オニワ　メノ
ナカガ　イタクテ　ナリマセン　メオ　オサエテ
イっショオケンメエニ　ニゲテ　イキマシタ

五十九頁

ウチデノコズチモ　ワスレテ　ニゲテ　イキマシタ
オニノ　ワスレタ　ウチデノコズチオ　ミルト
オヒメサマワ　コレワ　ヨイ　モノガ　アル＞ト　イっテ

六十頁

タイソオ　ヨロコビマシタ　コレオ　フルト　ナンデモ
ジブンノ　オモウ　トオリニ　ナルカラデス　ソコデ
イっスンボオシノ　セエガ　タカク　ナル　ヨオニ＞ト
イっテ　オヒメサマワ　サっソク　ウチデノコズチオ
フリマシタ　イっスンボオシノ　セエガ　スコシ　タカク
ナリマシタ　モっト　タカク　ナレ　モっト　タカク
ナレ＞ト　イイナガラ　ナンベンモ　フリマシタ
イっスンボオシワ　ダレニモ　マケナイ　オオオトコニ
ナリマシタ

〔甲〕
(イ) 發音　イっスンボオシ、俗語では常にイっスンボシとボを短くいふ。

注意

こゝは假名遣通りボオと長くいふ。ンマレ、持にウマレといはないで良い。（小學國語讀本朗讀法、卷一、一〇―一一頁、同七二頁參照。）コユビ、日常語（必しも俗語と限らず）で屢、コイビと發音する。此處は出來るだけユをはつきり發音する練習をするが良い。セエガ、日常語で、セイガとは云はない。ガ、これは前の語と續いてナリマシタガといふのが通常である。今此の特殊臨時の場合に限り「…マシタ」の次で切つたのである。從つてガといふ鼻音を發する。ツツキマシタ、稍速く發音するとツツ二つとも母音無聲化を起すことがある。こゝは注意して第二のツを有聲にいふ方が良い。オモウ　トオリ、日常語で屢、オモオトオリと發音する。此處もオモオといつて差支ない。語尾をはつきり發音しようと注意する時に限りオモウといふ發音が行はれてゐる。

（ロ）**アクセント**　オサズケ　クダサイ、續ける時オサズケクダサイの型の様になる。同様の例は、オネガイシマシタ、オイノリシマシタ、ノボツテイキマシタ、オサガシニナリマシタ、オハキニナロオト、ツカマツ

テシマイマシタがある。カミサマ、又はカミサマといふ人もある。フタツニ　ナッテモ、續ける時ナッテモのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、ナリマスヨオニ、オハキニナロオトシマシタ、デテキテ、タベヨオトシマシタ、ノンデシマイマシタ、ニゲテイキマシタ、オモウトオリニ、タカクナル、……ナリマシタ、がある。スコシモ常に平板式である。比較、スコシの此の型の類推により近頃スコシモといふ人があるがそれは舊來の東京語の型ではない。スコシノアイダ、之はスコシノアイダと平板にいふこともある。コシ「腰」は平板。參考、コシ「輿」。デテオイデニ　ナリマシタ、オイデニナリマシタだけ續ける時オイデニナリマシタの型の様になることがあるが、此處でさう發音するのは不適當である。何となれば、此の文は意味から云つて『出テ』が大切であり、『オイデニナリマシタ』は輕いのである。もしオイデニナリマシタの型の様に發音すると此の語の意味が強く聞え過ぎるからである。ダレモ此處は平板式である。別の場合にダレモといふことがあるが此處はさう云はない。チクリチクリ、ア

クセント不定。ニゲテ　比較、ニゲル。フルト「振」平板　參考、フルト「降ると」フリマシタは「振りました、降りました」共に同じ。ダレニモ、又はダレニモ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『二ツニナッテモ』の次は切らない。『毎日』の次も切らない。『少シノアヒダ』の次も切らない。『オバアサンカラ』(五十一頁)の次も切らない。『ガ』(五十三頁三行)の次で一寸切る方がよい。『アル日』(五十五頁)の次は切らない。『ドコカラカ』の次も切らない。『オナカノ中ヲ』(五十六頁)の次も切らない。『ウチデノコヅチモ』(五十八頁)の次を切つてはいけない。

(ロ) **速度**　『フンデハイケマセン』を稍速くいふ。其の他すべて通常の速度で、特に著しい變化をつけるべき處は無い。

(ハ) **抑揚調子**　『子ドモヲ一人』を強める。『少シモ』(四十九頁五行)を強める。『ヤッバリ』(五十頁)を強める。『針ヲ』を強める、『一本』を強めては良くない。一寸法師の言葉は稍調子の高い聲で而も弱くいふと面白いであらう。『オニガ』(五十五頁終より二行)を強める。『イタイイタイ』は大きな聲で叫ぶ樣にいふ。『コレハヨイモノ……』の『コレハ』を強める。『ヨイ』を強めては良くない。『モット高ク』『モット』の方を強める。(小學國語讀本朗讀法、卷二、六六頁終より第四行以下參照。)

六十一頁

ジュウロク』　カチカチヤマ』

ヨシオサント　タロオサンワ　ガヨオシデ　メンオ
ツクっテ　アソボオト　ソオダン　シマシタ』
ヨシオサンワ　ガヨオシニ　ウサギノ　カオオ
カキマシタ』　ミミオ　ナガク　カキマシタ』　メダマオ
アカク　ヌリマシタ』　タロオサンワ　ソレオ　ミテ
ボクワ　タヌキニ　シヨオ〉ト　イっテ　タヌキノ

六十二頁

六十三頁

カオオ　カキマシタ　ハナノ　リョオワキカラ　ミミエ
カケテ　チャイロニ　ヌリマシタ　フタリワ　ハサミデ
エオ　キリヌイテ　メンオ　コシラエマシタ　ソオシテ
ベツノ　ガヨオシオ　ホソナガク　キっテ　ソレオ
ジブンタチノ　アタマニ　アウ　ヨオニ　ワニ　ツクっテ
メンニ　ツケマシタ　フタリワ　メンオ　ツケテ
ミマシタ　ヨク　ニアイマシタ　タロオ　キミ

六十四頁

カチカチヤマゴっコオ　ショオヨオヨシオ　イイナ
ショオ　ソレカラ　フタリワ　フネオ　コシラエル
ソオダンオ　シマシタ　フネワ　アツイ　カミデ　フタツ

六十五頁

コシラエマシタ　ソオシテ　ナガイ　ヒモオ　ツケテ
クビエ　カケマスト　フネワ　オナカノ　ヘンニ
カカっテ　イマス　ヨシオ　ンマイ　ンマイ　ンマク
デキタ　サア　ボクワ　ウサギ　キミワ　タヌキダヨ
タロオ　ボクガ　タヌキカ　ヨシ　ヤロオ　ウサギノ
ヨシオサンワ　スコシ　カンガエテカラ　イイダシマシタ
ウサギ　タヌキクン　ヨイ　オテンキダネ　コレカラ
イっショニ　フナアソビオ　ショオ　タヌキ　ヨカロオ
ウサギト　タヌキワ　フネオ　コグ　マネオ　シマシタ
ウサギワ　ウタイマシタ　ウサギ　ウサギノ　フネワ

六十六頁

六十七頁

キブネ タヌキノ フネワ ドロブネ ソノウチニ
タヌキノ フネガ スコシ オクレマシタ タヌキ
オオイ ウサギクン ボクノ フネワ ナンダカ
オモクテ ススマナイ ヨオダ ウサギ ソンナ コトハ
ナイヨ キミノ コグノガ ヘタナノダ タヌキ
ソオカネ マタ シバラク コギマシタ タヌキワ
ダンダン オクレテ キマシタ タヌキ ヤア タイヘン
タイヘン ボクノ フネニ ミズガ ハイッテ キタ
ア フネガ シズム シズム ウサギクン タスケテ
クレ イツノマニカ トナリノ ヘヤニ ヨシオサンノ

六十八頁

オカアサント ネエサンガ キテ ミテ
イラっシャイマシタ ヨシオサンモ タロオサンモ
キガツイテ アワテテ ヤメマシタ オカアサンワ マア
ホントオニ ジョオズデスネ>ト イっテ オホメニ
ナリマシタ

〔甲〕

(イ) 發音 ンマイ、やはりウマイとは云はない。（前出六三頁ンマレマシタ、参照）『舟あそび』フネアソビでない。ススマナイ、日常の言葉で速く云ふ時ススマナイと始めのスの母音が無聲化することがある。此處ははつきり有聲にいふ方がよい。

(ロ) アクセント メン、かぶる面は平板式にいふ。『表面』の意の時はメンといふ。アソボオ又はアソボオといふこともある。ソオダンシマシタ、續ける時ソオダンシマシタの型の様になる。同様の例は、スス

六十九頁

マナイヨオダ、オクレテキマシタ、オホメニナリマシタがある。エオ「繪を」。參考、エオ(平)「柄を」。アウヨオニ、續ける時ヨオニのアクセントが餘り高くならない。同樣の例は、ツケテミマシタ、カカッテイマス、ハイッテキタ、ミテイラッシャイマシタがある。ンマク、ン(卽ち母音の無いm音)の音節が高くなる。オオイ、ヤア、ア、アクセント不定、多くは第二のオの邊を高く終を尻下りにいふ。ソンナコトワ、續ける時ソンナコトワ又はソンナコトワといふことが多い。

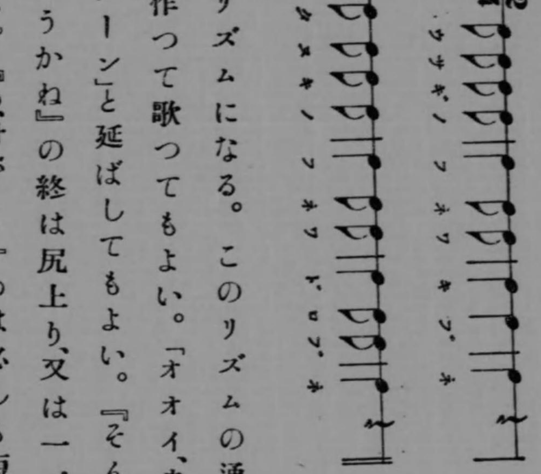
〔乙〕

(イ) **斷續** 『あそばうと』の次は切らない。ンマインマイは續けていふ。『大へん大へん』も續けていふ。『あ』の次で一寸切るとよい。『しづむしづむ』も續けていふ。

(ロ) **速度** 六十八頁『やあ大へん……』といふ狸の言葉は稍速くいふ。

(ハ) **抑揚調子** 『たぬきに』(六十二頁第三行)を強める。『……しようよ』『いゝなしよう』(六十三頁)は共に尻下り。『二つ』(六十四頁第三行)を強める。『たぬきだよ』(六十四頁末行)は尻上りの調子。『たぬきか』(六十五頁第一行)は尻下り。『よいお天氣だね』のねは一ぺん上つて又下る調子。

兎の歌(六十六頁)は



といふリズムになる。このリズムの通りいふ方が良い。勿論何か旋律を作つて歌つてもよい。「オオイ、ウサギクン」呼ぶ聲に擬するため「……クーン」と延ばしてもよい。『そんなことはないよ』の終は尻下り。『さうかね』の終は尻上り、又は一ぺん上つて又下る調子、いづれでもよい。『あ、舟が……』あは必しも短くいはないでよい。『助けてくれ』は「クレー」と延ばしてもよい。『まあ、ほうたうに』『ほんたうに』の方を强める。『じやうずですね』の終は一ぺん上つて又下る調子。

ジュウシチ　ネズミノ　チエ

七十頁

コノゴロ　ナカマノ　モノガ　ネコニ　トラレテ
コマルガ　ナニカ　ヨイ　クフウワ　アルマイカ＞ト
トシトっタ　ネズミガ　ナカマノ　モノニ　イイマシタ
ソノトキ　イっピキノ　コネズミガ　マエエ　デテ
イイマシタ　ヨイ　クフウガ　アリマス　オオキナ

七十一頁

スズオ　ネコノ　クビニ　ツケテ　オイテ　ソノ　オトガ
キコエタラ　ニゲル　コトニ　シテワ　ドオデショオ
ナルホド　ヨイ　カンガエダ＞ト　イっテ　ミンナ

カンシン　シマシタ　スルト　トシトっタ　ネズミガ
ソレモ　ヨイガ　ダレガ　ソノ　スズオ　ツケニ
イクノカ＞ト　イイマシタノデ　ミンナ　ダマっテ
シマイマシタ

七十二頁

〔甲〕

(イ) 發音　マエエ、日常語で屢マイエと發音される。此處ははっきりマエエといふべきである。

(ロ) アクセント　ニゲルコトニ、續ける時コトニのアクセントが餘り高くならない。同様の例はダマっテシマイマシタがある。

〔乙〕

(イ) 斷續　特に記すべきこと無し。

(ロ) 速度　通常、特に變化を附けるべき處なし。

(ハ) 抑揚調子　老鼠の言だけは稍ゆっくり落附いていふべきであらう。その他特に記すべきこと無し。

七十三頁

ジュウハチ キンギョ

メガ サメマシタ ユウベ カッテ イタダイタ

キンギョノ コトオ オモウト ジットシテソ

イラレマセン ワタクシワ トビオキマシタ ソオシテ

スグ エンガワニ デテ バケツノ ナカオ

ノゾキマシタ カゾエテ ミルト ヤッパリ ゴヒキ

イマシタ ミンナ キレエナ カワイイ キンギョデス

オカアサンガ ガラスノ キンギョバチオ モッテキテ

コレニ イレテ オヤリナサイ〉ト

七十四頁

オッシャイマシタノデ ワタクシワ スグ キンギョオ

キンギョバチエ ウツシテ ヤリマシタ キンギョワ

マエヨリモ ズット キレエニ ミエマス ヨコノ

ホオカラ ノゾクト キンギョガ キュウニ オオキク

ミエタリ マタ モトノ ヨオニ チイサク ミエタリ

シマス ユウベカラ ナニモ ヤラナイカラ オナカガ

スイテ イルダロオト オモッテ ワタクシワ

オカアサンニ フオ モラッテ キテ ヤリマシタ

七十五頁

〔甲〕

(イ) **發音** オモウト、日常語殊に稍速くいふ時オモオトと發音する。（前出オモウトオリ、原讀本五十九頁、本書六十二頁參照）。

(ロ) **アクセント** カッテ「買つて」。參考、カッテ「飼つて、勝つて」。キンギョノ

コトオ、續ける時コトオのアクセントが餘り高くならない。同樣の例は、カゾエテミルト、ゴヒキイマシタ、モトノヨオニ、ミエタリシマス、がある。ジツトシテワ、別々にはジツト(平) シテワ モツテキテ(原讀本三十頁、本書三十七頁參照。)ヨコノホオカラ、續ける時ヨコノホオカラの型の樣になる。ナニモ、殆ど常に平板である。かゝる場合ナニモの型は稀である。俗語ではナンニモといひ必ず平板式にいふ。モラッテキテ、續ける時モラッテキテとなる。

〔乙〕

(イ) **斷續** 『キレイナ』(七十三頁第三行)の次は切つてはいけない。『ノゾクト』で切り、次の『キンギョガ』の次は切らない。『私ハ』の次で切り『オカアサンニフヲモラッテ來テ』と續け、その次で切る可きである。もし原文の句讀點通りに切ると、「ワタクシワオカアサンニ」と續けてその次で切り、「フオモラッテキテヤリマシタ」と續けることになる。さうすると、「母に麩をやつた」といふ意味に聞える。原文の句讀點が朗讀における良い斷續法と一致しない著しい例である。

(ロ) **連度** 通常、特に變化を附けるべき處なし。

七十六頁

(ハ) **抑揚調子** 『トビオキマシタ』を強める。『ヤッパリ』を強める。『ズットキレイニ』を強める。

七十七頁

ジュウク ハナビ

ドント ナッタ ハナビダ キレエダ ソラ イッパイニ

ヒロガッタ シダレヤナギガ ヒロガッタ ドント

七十八頁

ナッタ ナンジュウ ナンビャク アカイ ホシ

イチドニ カワッテ アオイ ホシ モイチド カワッテ

キンノ ホシ

〔甲〕

(イ) **發音** モイチド、此處は韻文の音節のリズムを造るためわざと俗語の發音モイチドを使つてある。氣を附けた云ひ方ではモオイチドといふ。

(ロ) **アクセント**　ドント、元來アクセント不定、「ドン」は各場合における實際の音響に擬した發音をすべきであらう。此處は韻文のリズムを整へるため、通常のドントの發音をなし、調子もドを高くいふのがよいであらう。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『どんとなつた』の次と『きれいだ』の次と休止を成る可く短くするのがよい。眼前に顯れる光景の忽ち變つて行く心を表す。第一節と第二節との中間は稍長い休止を置く。『赤い星』『青い星』の次は休止、暫く赤色青色の續く心を表す。

(ロ) **速度**　もし速度に多少の變化を附けるならば『花火だ』は稍速く『きれいだ』は稍遲くいふ。

(ハ) **抑揚調子**　第二の『ひろがつた』は强めない。

ニ|ジュウ‖　キ|ンノ　オ|ノ‖
キ△コリガ　イケノ　ソ|バノ　モリデ　キ|オ　キ△っテ|

七十九頁

イマ|シ△タ‖　オ|ノニ　チ△カラ|オ　イレテ　コンコント
キ△っテ|　イマ|シ△タ‖　アンマリ　チ△カラ|オ　イレスギタノデ
オ|ノガ　テ|カラ　ハナ|レテ　トンデ　イキマ|シ△タ|　アっト
オモウ　マニ　オ|ノワ　フ△カイ　イケノ　ナカエ
ドブント　オ|チ△テ　シマイマ|シ△タ‖　シマ|っタ＞ト
キ△コリワ　オモ|ワズ　オ|オキナ　コエオ　ダシマ|シ△タ‖
ソオシ△テ　マっサ|オナ　ミズノ　ウエオ　ジっト
ミナ|ガラ|　ドオシ△タラ　ヨカ|ロオ＞ト　カンガエコンデ
イマ|シ△タ|　スルト　ソノ　ミズノ　ナカカラ　マっ|シロナ
ナガ|イ　ヒゲノ　ハ|エタ　オジ|イサンガ　デテ　キマ|シ△タ‖

八十頁

八十一頁

ソオシテ　ドオ　シタノダ＞ト　キキマシタ　キコリワ
イケノ　ナカエ　オノオ　オトシテ　シマイマシタ＞ト
コタエマシタ　ソレワ　カワイソオダ　ワタシガ
ヒロっテ　ヤロオ　コオ　ユウト　オジイサンノ

八十二頁

スガタワ　スグ　ミズノ　ナカニ　キエテ　ミエナク
ナリマシタ　シバラク　スルト　オジイサンガ　デテ
キマシタ　ソノ　テニワ　ウツクシイ　キンノ　オノガ
キラキラト　ヒカっテ　イマシタ　オマエノ
オトシタノワ　コレダロオ　イイエ　チガイマス
ソレデワ　ゴザイマセン　デワ　モオ　イチド　サガシテ

八十三頁

ミヨオ　オジイサンノ　スガタワ　マタ　ミズノ　ナカニ
キエマシタ　ソオシテ　コンドワ　ウツクシイ　ギンノ
オノオ　モっテ　デテ　キマシタ　デワ　コノ　オノカ

八十四頁

イイエ　ソレデモ　ゴザイマセン　テツノ　オノデ
ゴザイマス　ソオカ　デワ　モオ　イチド　サガシテ
ミヨオ　オジイサンノ　スガタワ　マタ　ミズノ　ナカニ
キエマシタ　オジイサンワ　コンドコソ　キコリノ

八十五頁

オトシタ　テツノ　オノオ　モっテ　デテ　キマシタ
コレダロオ　ハイ　ソレデ　ゴザイマス　ドオモ
アリガトオ　ゴザイマシタ　キコリワ　ソノ　オノオ

八十六頁

ウケトっテ　ナンベンモ　オレエオ　イイマシタ
オジイサンワ　オマエワ　ホントオニ　ショオジキナ
オトコダ　コノ　フタツノ　オノモ　オマエニ
アゲヨオ＞ト　イイナガラ　キンノ　オノト　ギンノ
オノオ　キコリニ　ヤリマシタ　キコリワ　フシギナ
オジイサンカラ　キンノ　オノト　ギンノ　オノオ
モラっタ　コトオ　キンジョノ　ヒトニ　ハナシマシタ
トナリノ　ワカイ　オトコモ　キコリデシタ　ソレオ
キクト　ジブンモ　キンノ　オノヤ　ギンノ　オノガ
ホシク　ナリマシタ　ワカイ　オトコワ　イケノ　ソバノ

八十七頁

八十八頁

モリエ　イキマシタ　オノデ　コンコント　キオ
キリハジメマシタ　ソノウチニ　ワカイ　オトコワ
ワザト　オノオ　テカラ　ハナシマシタ　オノワ
ドブント　イケノ　ナカエ　オチマシタ　ア　シマっタ＞ト
ワカイ　オトコワ　デキルダケ　オオキナ　コエデ
サケンデ　ミズノ　ウエオ　ミテ　イマシタ　アオイ
ミズノ　ナカカラ　オジイサンガ　デテ　キマシタ
ソオシテ　ドオ　シタノダ＞ト　キキマシタ　イケノ
ナカエ　オノオ　オトシテ　シマイマシタ＞ト　ワカイ
オトコワ　コタエマシタ　ソレワ　カワイソオダ

八十九頁

九十頁

ワタシガ　ヒロっテ　ヤロオ　コオ　ユウト

オジイサンノ　スガタワ　スグ　ミズノ　ナカニ　キエテ

ミエナク　ナリマシタ　ワカイ　オトコワ　キンノ

オノノ　コトバカリ　カンガエテ　マっテ　イマシタ

シバラク　スルト　ミズノ　ナカカラ　オジイサンガ

デテ　キマシタ　ソノ　テニワ　ウツクシイ　キンノ

オノガ　キラキラト　ヒカっテ　イマシタ　オマエノ

オトシタノワ　コレダロオ　ワカイ　オトコワ　スグ

九十一頁

ハイ　ソレデ　ゴザイマス>ト　イっテ　シマイマシタ

スルト　イママデ　ヤサシソオニ　ミエテ　イタ

九十二頁

オジイサンノ　カオガ　キュウニ　キツク　ナリマシタ

ソオシテ　オマエノ　ヨオナ　ウソツキニワ　キンノ

オノモ　ギンノ　オノモ　ヤル　コトワ　デキナイ>ト

イっテ　スグ　ミズノ　ナカニ　キエテ　シマイマシタ

〔甲〕(イ) 發音　オモウ　マニ、屢、オモオマニと發音する。（前出、七十八頁參照）

(ロ) アクセント　イケノ、離してはイケである。キっテ　イマシタ、續ける時イマシタのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、オチテシマイマシタ、デテキマシタ、ドオシタノダ、ミエナクナリマシタ、ヒカっテイマシタ、アリガトオゴザイマシタ、ホシクナリマシタ、ミテイマシタ、オトシテシマイマシタ、マっテイマシタ、がある。トンデイキマシタ、續ける時トンデイキマシタの型の様になる。同様の例は、ヒロっテヤロオ、サガシテミヨオ、キツクナリマシタ、キエテシマイマシタ、

がある。アット、アクセント不定。モラッタ　コトオ、續ける時、モラッタコトオともいふ。オノノ　コトバカリ、バカリを強める時は、オノノコト　バカリといふ。ヤル　コトワ、續ける時ヤルコトワともいふ。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『をのが手からはなれて』をのがの次は切らない方がよい。『深い池の中へ』の次も切らない方がよい。『すぐ』(八十一頁)の次も切らない。『木こりは』(八十六頁第三行)の次で切る。『金のをのと』の次は切らない。

(ロ) **速度**　『あ、しまつた』は稍速くいふ。

(ハ) **抑揚調子**　『あ、しまつた』『あ』は極短くいふ。その終で切らないですぐ『しまつた』へ續ける。『ほんたうに』(八十五頁)を強める。

ニジュウ　イチ　ジドオシャ

オヒルカラ　ワタクシワ　マサオサンノ　ウチエ

九十三頁

アソビニ　イコオト　オモっテ　ソトエ　デマシタ

トチュウマデ　キテ　フト　ミルト　チョオド

マサオサンノ　ウチノ　マエニ　ジドオシャガ　トマっテ

イマシタ　ソバニ　ヒトガ　シゴニン　ヨっテ　イマシタ

ナンダロオ>ト　オモっテ　ワタクシワ　イソイデ

イっテ　ミマシタ　マサオサンガ　イマシタノデ

ナンデス>ト　キキマスト　マサオサンワ　ジドオシャノ

九十四頁

コショオデス>ト　イイマシタ　ドンナ　コショオデス>ト

キキマシタガ　マサオサンモ　ヨク　ワカラナイト

ミエテ　ダマっテ　イマシタ　ソノ　ジドオシャニ

九十五頁

ノっテ　キタラシイ　サンニンノ　シラナイ　オジサンガ
タっテ　イマシタ　ソノ　ナカノ　ヒトリガ　アノ
ヒダリガワノ　ウシロノ　クルマオ　ゴランナサイ＞ト
イイマシタ　ミルト　ソノ　クルマオ　イマ
ウンテンシュガ　イっショオケンメエニ　ナっテ
ハズソオト　シテ　イル　トコロデス　クルマワ
タイヤガ　ヒシャゲテ　イマシタ　タイヤガ　ヒシャゲテ
イマスネ＞ト　イイマスト　オジサンワ　アノ　タイヤノ
ナカニ　モオ　ヒトツ　ゴムノ　クダガ　アルノデス＞ト
イイマシタ　ワタクシワ　オトオサンノ　ジテンシャガ

九十六頁

九十七頁

ソオ　ナっテ　イル　コトオ　オモイダシマシタ　ソノ
クダガ　ヤブレテ　ナカノ　クウキガ　ヌケテ
シマっタノデス　オジサンガ　コオ　イっテ　イル
アイダニ　ウンテンシュワ　クルマオ　ハズシマシタ
ソオシテ　ジドオシャノ　ウシロニ　ツケテ　アっタ
ベツノ　クルマオ　モっテキテ　トリツケマシタ
スっカリ　シゴトガ　スムト　ウンテンシュワ
オジサンタチニ　サア　ドオゾ　オマチドオサマデシタ＞ト
イイマシタ　オジサンタチ　サンニンワ　ヤア
ゴクロオデシタ＞ト　イっテ　ジドオシャニ　ノリマシタ

九十八頁

ウンテンシュモ　ノリマシタ』　ブルブル　ブルブル＞ト

ジドオシャガ　ウナリダシマシタ』　オジサンタチワ

ワタクシタチニ　サヨオナラ＞ト　イイマシタ』

ワタクシモ　マサオサンモ　サヨオナラ＞ト　イイマシタ』

ジドオシャワ　ウゴキダシマシタ』　ブっブウ』

ジドオシャワ　ハシっテ　イキマス』　ワタクシタチワ

ジドオシャガ　ミエナク　ナルマデ　タっテ　ミテ

イマシタ』

九十九頁

百頁

〔甲〕

(イ) **發音**　ハシっテ、又はシの母音を無聲化させずにハシっテともいふ。

(ロ) **アクセント**　ニジュウ　イチ、二十一以上は音節の數が多くなるので、

おのづから『二十』と『一』と二つの單語として發音され、別々のアクセントを附ける。イコオト、又はイコオトともいふ。トマっテ　イマシタ、續ける時トマっテイマシタの型の様になる。同様の例はヨっテイマシタ、イっテミマシタ、ヒシャゲテイマシタ、モオヒトツ、ヌケテシマっタノデスがある。ヨっテ　參考、ヨっテ「酔つて」「選つて」。ワカラナイト　ミエテ、續ける時ミエテのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、ダマっテイマシタ、タっテイマシタ、ツケテアっタ、ハシっテイキマス、ミエナクナルマデ、ミテイマシタがある。ノっテ　キタラシイ、續ける時ノっテキタラシイともいふ。キタラシイ一語は又キタラシイともいふ。ヤア、アクセント不定。多くは平板式の様にいふ。ブルブル、ブっ等アクセント不定。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『オヒルカラ』の次で切り『私ハ』の次は切らない。『空氣が』(九十七頁)の次は切らない方がよい。『ウシロニツケテアッタ』の次も切らない方がよい。

(ロ) **速度**　此の課の様な平な叙事的文は特に速度の變化を附けるべき

處が無い。

(ハ) **抑揚調子** 『自動車が』(九十三頁第二行)を強める。こゝで始めて自動車の語が出るからである。『モウ一ッ』(九十六頁第五行)を強める。『ヌケテシマッタ』を稍強める。ブルブル等の擬音は低い調子の聲でいふとよい。

百一頁

ニジュウ　ニ　ナガイ　ミチ

ドコマデ　イッテモ　ナガイ　ミチ　ユウヒガ　アカイ

百二頁

モリノ　ウエ—ドコマデ　イッテモ　ナガイ　ミチ

ゴオント　オテラノ　カネガ　ナル—ドコマデ　イッテモ

ナガイ　ミチ　モオ　カエロオヨ　ヒガ　クレル

〔甲〕

(イ) **發音** 特にいふべき事なし。

(ロ) **アクセント** ゴオント、アクセント不定。モオは平板、モオの様にはいはない。

〔乙〕

(イ) **斷續** 『行っても』の次は切らない、各節同じ。『長い道』(各節同じ)の次は短い休止。各節の終は稍長い休止。『赤い』の次で一寸切る。『お寺の』の次は切らない。『かへらうよ』の次で一寸切る。

(ロ) **速度** 全體としてゆつくりした速度が適當である。『ゴオント』といふ擬音は稍長く引延していつてよい。

(ハ) **抑揚調子** 『どこまで行っても長い道』が三回繰返される。朗讀の際そこに多少の變化を附けるとよい。例へば第二節の『どこまで』云々だけ低い弱い聲でいふ等。『もうかへらうよ』を多少強めてよい。

百三頁

ニジュウ　サン　ムシバ

ハナコサンワ　ハガ　イタイノデ　ヒトバンジュウ

クルシミマシタ　アサニ　ナッテモ　マダ　イタイノガ

百四頁

ナオリマセン　ハナコサンワ　オカアサント　イっショニ
ハノ　オイシャサマエ　イキマシタ　オイシャサマワ
スグ　ミテ　クダサイマシタ　ヤア　ニホン　ナランデ
ムシバガ　デキテ　イル　オカシオ　タベスギマシタネ＞ト
イっテ　クスリデ　アラっタリ　クスリオ　ツケタリ
シテ　クダサイマシタ　ハナコサンワ　イタイノガ
スコシ　ナオっタ　ヨオニ　オモイマシタ
オイシャサマワ　オカアサンニ　コノ　マエノ　ホオノ
ムシバワ　ハエカワル　ハデスガ　オクノ　ホオノワ
イっショオ　ツカウ　ダイジナ　ハデス　ソレガ　コオ

百五頁

百六頁

ムシバニ　ナっテワ　イケマセンネ＞ト
オっシャイマシタ　ソオシテ　ハナコサンニ　ハナコサン
アナタワ　ハオ　ミガキマスカ＞ト　オキキニ
ナリマシタ　マイアサ　ミガキマス＞ト　ハナコサンワ
コタエマシタ　オイシャサマワ　ヨル　ネル　マエニモ
ミガクト　イイデスガネ　ソオスルト　コンナニ　ハガ

百七頁

ワルク　ナラナイデショオ＞ト　オっシャイマシタ
ハナコサンワ　ウナズキマシタ　オカアサント
イっショニ　オイシャサマノ　オウチオ　デタ　トキ
ハナコサンワ　モオ　ハノ　イタミオ　ワスレテ

ニコニコシテ　イマシタ

〔甲〕

(イ) **發音**　ツカウ、ツコオといつてはいけない。オウチ、此處はオオチとならぬ様注意するとよい。（小學國語讀本朗讀法卷二、四一頁參照。）

(ロ) **アクセント**　ヤア、アクセント不定、此處は平板式の様にいふ。ニホン　參考、ニホン、ニっポン（日本）。デキテ　比較、デキル。ナオっタヨオニ、續ける時ヨオニのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、マエノホオノ、オクノ、ホオノ、デタトキ、ニコニコシテイマシタがある。ネル　參考、ネル「練る」。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『花子さんは』の次、『はがいたいので』の次、いづれを切り、いづれを續けてもよい。『むしばができてゐる。〈おくわしを……』の間（〈）は休止を置くとよい。『この、前の……』『この』の次で一寸切つてよい。『前の』を強めて發音すれば『この』の次で切らないでも意味の誤解を起すことは無いであらう。『ねる前にも』の次は切らない方がよい。

(ロ) **速度**　特に變化を附けるべき處なし。

(ハ) **抑揚調子**　『まだ』を稍强める。『すぐ』を强める。『たべすぎましたね』の終は尻上りの調子。『少し』を稍强める。『前の』『おくの』を强める。『大じな』を强める。『いけませんね』の終は一べん上つて又下る調子。醫師の言葉『花子さん』の終、『みがきますか』の終、共に尻上りの調子、これは子供に向つていふ柔かい語氣を表す。『ねる前にも』殊にその中『前』を强める。『いゝですがね』の終は一べん上つて又下る調子。『ならないでせう』の終は尻上り、下りいづれでもよいが、寧ろ上げる方が柔かでよいであらう。尻上りにしても必しも疑問の意味とは限らない。『……ならないでせうよ』などと「よ」を附けて尻上りにいふのと同じ氣持である。

ニジュウシ　ウラシマ　タロオ

ムカシ　ウラシマ　タロオト　ユウ　ヒトガ

アリマシタ‖アルヒ　ハマベオ　トオッテ　イルト
コドモガ　オオゼエ　アツマッテ　ナニカ　サワイデ
イマシタ‖ミルト　カメオ　イッピキ　ツカマエテ
コロガシタリ　タタイタリ　シテ　イジメテ　イルノデス‖

百九頁

ウラシマワ　ソンナ　カワイソオナ　コトオ　スル
モノデワ　ナイヨ＞ト　イイマスト　コドモラワ　ナニ
カマウ　モノカ　ボクタチガ　ツカマエタノダ
モノ＞ト　イッテ　ナカナカ　キキマセン‖　ウラシマワ
ソレナラ　オジサンニ　ソノ　カメオ　ウッテ

百十頁

オクレ＞ト　イッテ　カメオ　カイトリマシタ‖

ウラシマワ　カメノ　セナカオ　ナデナガラ　モオ
ニドト　ツカマルナヨ＞ト　イッテ　ウミエ　ハナシテ
ヤリマシタ‖ソレカラ　ニサンニチ　ノチノ　コトデシタ‖
ウラシマガ　フネニ　ノッテ　イツモノ　トオリ　ツリオ

百十一頁

シテ　イルト　ウラシマサン　ウラシマサン＞ト　ヨブ
モノガ　アリマス‖　ダレダロオト　オモッテ
フリカエッテ　ミルト　オオキナ　カメガ　フネノ
ソバエ　オヨイデ　キテ　ピョコリト　オジギオ
シマシタ‖　ソオシテ　コノアイダワ　アリガトオ
ゴザイマシタ‖　ワタクシワ　アノトキ　タスケテ

百十二頁

イタダイタ　カメデス‖　キョオワ　オレエニ
リュウグウエ　オツレ　シマショオ　サア　ワタクシノ
セナカエ　オノリクダサイ＞ト　イイマシタ‖　ウラシマワ
ソレワ　アリガトオ＞ト　イッテ　カメノ　セナカニ

百十三頁

ノリマシタ‖　カメワ　ダンダン　ウミノ　ナカエ
ハイッテ　イキマシタ‖‖シバラク　イクト　ムコオニ
アカヤ　アオヤ　キデ　ヌッタ　リッパナ　モンガ
ミエマス‖　カメガ‖　ウラシマサン‖　アレガ　リュウグウノ

百十四頁

ゴモンデス＞ト　イイマシタ‖‖マモナク　ゴテンエ
ツキマシタ‖　タイヤ　ヒラメナドガ　ムカエニ　デテ

キテ　オクノ　リッパナ　ゴテンエ　トオシマシタ‖
ウツクシイ　タマヤ　カイデ　カザッタ　ソノ　ゴテンワ

百十五頁

メモ　マブシイホド　キレエデス‖　ソコエ
オトヒメサマガ　デテ　イラッシャイマシタ‖　ソオシテ
コノアイダワ　カメオ　タスケテ　クダサッテ

百十六頁

アリガトオ　ゴザイマス‖　ドオゾ　ユックリ　アソンデ
イッテ　クダサイ＞ト　イッテ　イロイロ　ゴチソオオ
シテ　クダサイマシタ‖　タイヤ　ヒラメヤ　タコナドガ
オオゼエデ　オモシロイ　オドリオ　オドリマシタ‖
ウラシマワ　アマリ　オモシロイノデ　イエエ

カエルノモ　ワスレテ　マイニチ　マイニチ　タノシク
クラシテ　イマシタ　シカシ　ソノウチニ　オトオサンヤ
オカアサンノ　コトオ　カンガエルト　イエエ
カエリタク　ナリマシタ　ソコデ　アルヒ
オトヒメサマニ　ドオモ　ナガク　オセワニ　ナリマシタ
アマリ　ナガク　ナリマスカラ　コレデ　オイトマオ
イタシマス＞ト　イイマシタ　オトヒメサマワ　シキリニ
トメマシタガ　ウラシマガ　ドオシテモ　キキマセンノデ
ソレデワ　コノ　タマテバコオ　アゲマス　シカシ
ドンナ　コトガ　アッテモ　フタオ　アケテワ

百十七頁

百十八頁

ナリマセン＞ト　イッテ　キレエナ　ハコオ　オワタシニ
ナリマシタ　ウラシマワ　タマテバコオ　カカエ　カメニ
ノッテ　ウミノ　ウエエ　デマシタ　モトノ　ハマベエ
カエッテ　キマスト　オドロキマシタ　ムラノ　ヨオスワ
スッカリ　カワッテ　イマス　スンデ　イタ　イエモ
ナク　オトオサンモ　オカアサンモ　シンデ　シマッテ
シッタ　ヒトワ　ヒトリモ　オリマセン　コレワ
ドオシタ　コトカト　ウラシマワ　ハコオ　カカエナガラ
ユメノ　ヨオニ　アチラコチラト　アルキマワリマシタ
コンナ　トキニ　タマテバコオ　アケタラ　ドオカ

百十九頁

百二十頁

ナルカモ　シレナイト　オモっテ　オトヒメサマノ
イっタ　コトモ　ワスレテ　ソノ　フタオ　アケマシタ
スルト　ナカカラ　シロイ　ケムリガ　スウト
タチノボリマシタ　ソレガ　カオニ　カカっタカト
オモウト　ウラシマワ　カミモ　ヒゲモ　イチドニ
マっシロニ　ナっテ　シワダラケノ　オジイサンニ
ナっテ　シマイマシタ

〔甲〕

(イ) **發音**　カマウ、カモオといつてはいけない。カカっタカ、少し速くいふ時始のカの母音が無聲化してカカっタとなることがある。此處は成るべくさうならない様に注意する方がよい。オモウト、屢〻オモオトといふ。(前出七八頁參照。)

(ロ) **アクセント**　ウラシマタロオ、續けていふ時ウラシマタロオと一語の様にいふ。スル　モノデワ、屢〻續けてスルモノデワといふ。カマウモノカ、俗語ではカマウモンカ、カマアモンカなどといふ。避ける方がよい。ボクタチ、ボクを平板にいふ人はボクタチといふ。ウつテ　參考、ウっテ「打つて」。ニサンニチ、又はニサンニチ。ヨブ　モノガ。屢〻續けてヨブモノガといふ。オツレ　シマショオ、續ける時、オツレシマショオの型の様になる。同様の例は、クラシテイマシタ、オワタシニナリマシタ、カワっテイマス、ユメノヨオニ、がある。キデ「黄」といふ語は日常殆ど使はない、多くはキイロ(平)といふ。從つて「キ」も平板にいふ。參考、キデ(平)氣で」、キデ「木で」。　マモナク、又はマモナク、デテ　キテ、續ける時デテキテといふ。タスケテ　クダサっテ、續ける時クダサっテのアクセントが餘り高くならない。同様の例は、アリガトオゴザイマス、カエリタクナリマシタ、カエっテキマスト、ナっテシマイマシタ、がある。タコ、章魚も凧も同じくタコである。コンナトキニ、又は續けてコンナトキニ。イっタ　コトモ、又續けてイっ

タコトモ。スウト、アクセント不定。カミモ　參考、カミ「紙」、カミ「神」「上」。シワダラケノ、又は平板式にいふ人もある。

〔乙〕

(イ) **斷續**　『ころがしたり』の次は切らない方がよい。『舟にのつて』(百十頁末行)の次は切らない方がよい。『浦島さん』二回繰返す、その中間は斷續隨意。『この間は』の次は切らない方がよい。『けふは』の次『おれいに』の次、いづれを切りいづれを續けてもよい。『おくの』(百十四頁第五行)の次は切らない。『かざった』の次も切らない方がよい。『ごてんは』の次で切る。『かへつて來ますと』(百十九頁第二行)の次は一寸休止を置くとよい。次の「驚く」といふ語を強めるためである。『おとうさんもおかあさんも』の間は切らない。『すると』(百二十一頁)で切り『中から』の次は切らない。

(ロ) **速度**　子どもの言葉『何かまふものか……』は稍速くいつてよい。浦島の言葉『もう二度とつかまるなよ』は稍ゆつくり、優しく親切に言ひ聞かす心特。

(ハ) **抑揚調子**　『……するものではないよ』の終は尻上り尻下りいづれでもよい。下げる時は「たしなめる」抑へ附ける」樣な語氣になり、上げる時は物柔かに諭す語氣になる。後者の方が適當であらうか。『つかまるなよ』の終は尻上りでなければならない。『助けていたゞいた』の方を、その次の『かめです』よりも稍強くいふ。龜の言葉『浦島さん』(百十三頁末行)は尻下りの調子。『あれが』を強める。『まぶしい』を強める。『おとひめさま』を強める。『ゆつくり』を強める。『あまり』(百十六頁第六行)を強める。『玉手箱』(百十八頁第三行)を強める。『……かへつて來ますと』の次で一寸切つて、次の『おどろきました』を稍強める。『一人も』を強める。

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月十一日發行

小學國語讀本朗讀法（卷三）　【定價一圓拾錢】

著者　神保格
發行者　東京市麻布區龍土町四十八番地　岡本正一
印刷者　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地　山本禎男
印刷所　東京市牛込區山吹町三丁目百九十八番地　宗文社印刷所

發兌　東京市麻布區龍土町四十八番地　出版部　厚生閣
電話番號　麻布九五三六〇八〇番

東京高師教授 石山脩平著

辨證的教育學

菊判洋布裝 三百三十頁 索引附函入

定價二圓九十錢 送料二十二錢

【最新刊】

辨證教育學は、私にとつては、唯一の眞實の教育學である。それは教育の本質も目的も段階も方法も辨證的見地によつてのみ眞に把握し得られるとの信念の下に、是等諸問題を一貫せる立場より整合的に取扱へる教育學體系である。（中略）本邦教育界の定めなき流行に飜弄せられぬためには、靜かに深く教育永遠の使命を考へねばならぬ。時流の急迫に空しき焦燥を繰返さぬためには、中正にして强靱なる實踐力を把握しなければならぬ。（著者）——と。以て本書の眞價を知るに足る。

教壇に於て實踐し得る限りの强靱なる迫力を持つた最初の教育學！新時代に適應した眞實なる最新教育學だ

【内容抄】—緒論（辨證的教育學の意義及び組織）—第一篇 辨證的教育本質論（序說 教育の本質とその求め方・第一章 教育の基調としての愛・第二章 教育の目的論（教育の目的とその取扱方・陶冶理念・陶冶理想）—第二篇 辨證的教育目的論（教育段階論（序說 精神發達及び教育段階の意義とその取扱方・第一章 精神發達の概觀・第二章 教育の段階）—第三篇 辨證的教育方法論（序說 教育の一般的方法・第一章 辨證的教授論・第二章 教育の辨證法）—第四篇 辨證的訓育論（序說 精神發達の概觀・第一章 辨證的訓育の方法）

丸山林平著 **國語教育學** 價二・四〇 送料二・二〇

佐藤齋々・木村秀一・榮治共著 **生活轉證的教授原論** 價三・四〇 送料二・二〇

廣島高等師範訓導 佐藤德市著

菊判洋布裝 函入三五〇頁 定價二圓六十錢 送料二十二錢

新刊

辯證法的解明 讀み方教育の新機構

社會的現存としての文を辯證法の立場により科學的に解明し茲に新しく動的聯關的にありとする語の實用的讀み方教育を宣揚提唱す

生命の讀み方から形象の讀み方へ！ その第一旗手として赫々の功績を擧げて來た著者は今茲に新しい社會に適應せしむべく、主客聯關の語の動的讀み方教育を提唱する。新しい讀み方教育の金字塔だ

☆整然充實の内容☆

第一篇 序論
第一章 讀み方教育何處へ行く
第二章 來るべき時代の讀み方に與へられたるもの
第三章 讀み方教育の新機構
第二篇 本論
第一章 讀み方教育の根柢に横はる大問題
第二章 文と語
第三章 語を優位とする讀み方教育
第四章 文を優位とする讀み方教育
第五章 形象の讀み方固有の領域
第六章 形象の讀み方に對する從來の解明法と語の性格並にその連關について
第七章 文と語の性格並にその連關について
第八章 表現の辯證法
第九章 理會の辯證法
第十章 教材觀の三つの類型
第十一章 生活と論理
第十二章 指導過程は何が決めるか
第十三章 形象と理會
第十四章 辯證法的讀み方の指導過程

形象の讀み方教育 價二・〇九〇 送一・八 佐藤德市著

辨證的日本精神への讀方教育

吉田義則著

四六判 布装 國人三〇六頁

定價一圓八十錢 送料四十錢

辨證法—それは讀み方教育の持つ最も新しい且つ最も正しい方向！

日本精神—それは民族主義教育の宣揚を示す清新適確の新讀み方！

生きた讀み方教育を實踐せんがために、著者は鋭意研鑽多年、こゝに初めて、その眞摯なる研究を社會的歴史的な具體的精神表現としての民族的國語教育に高揚樹立した。讀み方教育の眞の目的に徹し之を擴充する爲に捧げられた此恐るべき新教育人の素晴らしい躍進的記錄を見よ

【內容抄】第一章辨證的日本教育の目的（現代教育の意味深く推移・日本精神研究の種々相・社會的歴史的日本體驗流・小學校令第二條の吟味・辨證的日本教育の目的）第二章國語愛即國家愛の教育（言語及び國語の意義・教則第三條の批判）第三章國語愛の迷信（國語愛・日本語の特質）第四章持つ教材の研究・和魂を有つ教材の研究（音聲上の日本精神と國語の形式）第五章日本文字・と國語の研究（荒魂を有つ教材の研究・日本語の特質）第六章自然の讀方教育（自然の方法・と國語教育の意義及び教則の沿革と國語の吟味・教則の批判）第七章自然の讀方教育の實踐（自然的方法・指導の實際・教師・日本精神と特殊語の研究・辨證的日本教育の目的・自然的讀方・自然的指導の行程）其の他

新刊 辯證法的解明 讀み方教育の新機構 佐藤德市著 價二・六〇 送一・四一

十三版 形象の讀み方教育 佐藤德市著 價二・九〇 送一・八一

教育優良圖書選

厚生閣

電話九段33〜三二一八番 振替東京五九六〇〇番

御註文の仕方

以下掲載の各種の教育書は全國各地の書店にありますが、若し品切の節は御地の書店に御註文下さるか、或は直接弊閣へ御申込みを願ひ上げます。御註文は振替の御送金が最も安全で且つ便利です。

【國語教育】

最近の文學・文章研究と國語教育 千葉春雄氏編 價二・五〇 送・二二

最近の心理學と國語教育と問題 千葉春雄氏編 價二・七〇 送・二二

國語教育の科學的研究 千葉春雄氏編 價二・五〇 送・二二

國語教育學 丸山林平氏著 價四・二〇 送・二二

形象の讀み方教育 佐藤德市氏著 價二・九〇 送・一八

國語の本質とその教育 佐藤德市氏著 價二・六〇 送・一八

生命の讀方教育 佐藤德市氏著 價三・四〇 送・二二

讀み方教育要說 千葉春雄氏著 價四・八〇 送・二二

讀方教育の鑑賞 宮川菊芳氏著 價二・〇〇 送・一四

國語科要旨の批判と解說 宮川菊芳氏著 價一・八〇 送・一四

態度馴致の讀方教育 宮川菊芳氏著 價二・六〇 送・一四

國語教育診斷 武藤要氏著 價二・八〇 送・一四

國語教材內觀の方法 齋藤榮治氏著 價二・六〇 送・一四

辨證法的國語學習 齋藤榮治氏著 價二・三〇 送・一四

辨證法的讀方教育 森本安市氏著 價一・八〇 送・一四

小學國語讀本朗讀法　神保格氏著
（巻一）價・八〇（巻二）價・九〇各送・一四

東京文理大教授　神保格氏著
尋常小學國語讀本　發音とアクセント
【現行讀本三年以上の用書】
尋三　價一・九〇
尋四　價二・〇〇
尋五　價二・一〇
尋六　價二・二〇
送各・一四

國語發音アクセント辭典　神保格・常深千里共著
價二・五〇　送・一四

小學國語讀本の指導と其理論　千葉春雄氏著
（巻一・巻二）　價各一・八〇　送・一四

小學國語讀本教材法事典　市京高師　野村芳兵衛・山内才治・田中豐太郎・田中武烈氏共著
尋一用全一冊（昭和八年十一月刊行）

【綴方教育】

最近の文學と綴り方教育　志垣寛氏著
價一・八〇　送・一四

生活させる綴り方指導　千葉春雄氏著
價二・六〇　送・一四

童謡と綴り方　千葉春雄氏著
價一・八〇　送・一四

綴方家庭學習（尋常科一年ヨリ六年マデ全六冊）　千葉春雄氏著
價各〇・五〇　各・〇八

形象原理に立つ綴方教育の實際　古見一夫氏著
價二・一〇　送・一四

村の綴方　木村文助氏著
價二・三〇　送・一四

土の綴方　富原義德氏著
價二・六〇　送・一四

教室用綴り方　富原義德氏著
價二・九〇　送・一四

實用的綴方教育　川村章氏著
價二・八〇　送・八

低學年の綴り方　金子好忠氏著
價二・〇〇　送・一四

生活への兒童詩教育　稲村謙一氏著
價二・〇〇　送・一四

生活開發の綴方教育　川口半平氏著
價二・〇〇　送・一四

手紙日記と綴方教育　武藤要氏著
價二・〇〇　送・一四

科學的綴方教育の設營　佐々井秀緒氏著
價二・〇〇　送・一四

新文話と綴り方教育　佐々井秀緒氏著
價二・六〇　送・一八

こどもの詩教育　佐々井秀緒氏著
價二・三〇　送・一四

詩の指導と綴方教育　久保田宵二氏著
價二・〇〇　送・一四

日本兒童新詩集　吉田瑞穂氏編著
價一・五〇　送・一四

綴方心理學　西山庸平氏著
價二・八〇　送・一四

子供の鄕土研究と綴方　峯地光重氏編著
價一・五〇　送・一四

【實際教育問答叢書】

修身科教育問答　川島次郎氏著
價二・〇〇　送・一四

讀方科教育問答　宮川菊芳氏著
價二・〇〇　送・一四

綴方科教育問答　千葉春雄氏著
價二・〇〇　送・一四

書方科教育問答　水戸部寅松氏著
價二・〇〇　送・一四

算術科教育問答　稲次靜一氏著
價二・九〇　送・二三

地理科教育問答　齋藤英夫氏著
價二・〇〇　送・一四

國史科教育問答　大久保馨氏著
價二・〇〇　送・一四

理科科教育問答　堂東傳氏著
價二・〇〇　送・一四

圖畫科教育問答　大竹抽三氏著
價二・〇〇　送・一四

唱歌科教育問答　青柳善吾氏著
價・〇〇　送・一四

手工科教育問答　山形寛氏著
價二・〇〇　送・一四

體操科教育問答　齋藤黑雄氏著　價二・〇〇　送・一四

裁縫科教育問答　田原美榮氏著　價二・〇〇　送・一四

家事科教育問答　佐々木君代・高橋さき兩氏著　價二・〇〇　送・一四

劇とお話教育問答　長尾豐氏著　價二・〇〇　送・一四

【修身教育】

學校講話新資料　教育資料研究會編　價三・四〇　送・二二

生活訓練と道德教育　野村芳兵衛氏著　價二・八〇　送・一四

勞働創造の修身教育　河野通賴氏著　價二・五〇　送・一四

生活內省と修身教育　河野通賴氏著　價二・五〇　送・一八

全人格的生活と修身教授の諸相　河野通賴氏著　價二・五〇　送・一八

惱みの修身　木村文助氏著　價二・六〇　送・一四

生活行の修身教育（尋一ヨリ學年別全六冊）　齋藤榮治氏著　價各二・八〇　各・一四

【地理・歷史】

地理教育の新思潮と實際經營　海老澤匡氏著　價三・四〇　送・二二

改訂小學地理教材と教授法（尋五用）　西龜正夫氏著　價一・九〇　送・一四

改訂小學地理教材と教授法（尋六用）　西龜正夫氏著　價二・一〇　送・一四

改訂小學地理教材と教授法（高一用）　西龜正夫氏著　價一・八〇　送・一四

滿洲國中心支那地理　西龜正夫氏著　價三・四〇　送・一八

鄉土地理の調べ方と實例　西龜正夫氏著　價一・八〇　送・一四

日本人口地理　及川甚之丞氏著　價三・〇〇　送・一八